

児玉町文化財調査報告書 第12集

根 田 遺 跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第12集

根^ね 田^た 遺 跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

1990

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

児玉町の北部に位置する共和地区は、中央部を流れる女堀川の両側に比較的大きな低地を有し、当地方の中心的な穀倉地帯として発展してきた地域である。そのため歴史的にも古くから栄えていたようで、古墳時代には県内最古と言われる埼玉県重要選定遺跡の鷺山古墳をはじめ、当地方で最大級の首長墓である児玉町指定史跡の金鎖神社古墳や生野山將軍塚古墳など著名な古墳が集中し、奈良時代には低地の水田部に現在でも明瞭に残る一町四方の区画が碁盤の目のように連続する条里形地割りが施工されている。また、平安時代末から鎌倉時代には阿佐美氏・真下氏・蛭川氏・今井氏・四方田氏等有名な児玉党武士団の本拠地として、それら豪族の居館と推測される多くの館跡が存在し、児玉党武士団にまつわる伝承も数多く残っている。

このように、共和地区はその広大な水田地帯の開発を背景にして古くより発展した地域で、昭和60年度より継続して実施されている現在の県営ほ場整備事業も、1200年前の条里制に次ぐ二度目の大規模なほ場整備であり、当地区の歴史に新たな1ページを飾る歴史的大事業として位置付けられよう。しかし、事業の実施に伴って破壊される遺跡も多く、それらの保存についても最大限の努力を傾けなければならないことは、現代に生きる我々の責務として、常々配慮してきたところである。

今回報告する根田遺跡についても、その保存措置について関係機関と協議を重ねた結果、やむをえず破壊される部分に関しては発掘調査により記録保存することになったものである。発掘調査の実施にあたっては、埼玉県本庄土地改良事務所をはじめとする関係機関はもとより、地元児玉南部土地改良区の皆様には多大なご協力を賜わった。それらに対しここに心より感謝申し上げるとともに、ほ場整備の実施による地元農業の益々の発展を祈念する次第である。

平成2年3月1日

児玉町教育委員会

教育長 野 口 敏 雄

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字下浅見字根田に所在する根田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和62年度県営は場整備事業児玉南部地区の工事に伴う事前の記録保存を目的として、昭和62年8月28日から10月30日の期間に実施した。
3. 発掘調査は、事業主体者である埼玉県の委託を受けて児玉町教育委員会が実施し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。
4. 発掘調査地点は、本遺跡の中央部を東西に走る小排水路部分をA地点、北端部の削平部分をB地点、その東側の小排水路部分をC地点とした。
5. 発掘調査及び本書刊行に要した経費は、埼玉県本庄土地改良事務所委託金である。
6. 本書の挿図作成と執筆及び編集は、恋河内が行った。
7. 本書の写真は、遺構を恋河内が、遺物を福島恵美子が撮影した。
8. 発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

赤熊浩一、伊丹 徹、太田博之、岡本幸男、金子彰男、駒宮史朗、坂本和俊、篠崎 潔、須田英一、外尾常人、高橋一夫、田村 誠、富田和夫、長滝歳康、中村倉司、長谷川勇、増田一裕、増田逸朗、丸山 修、矢内 勲、埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県農政部耕地課、埼玉県本庄土地改良事務所、児玉南部土地改良区、本庄市教育委員会

9. 発掘調査及び本書刊行のための整理作業には、下記の者が参加した。

飯島満江、伊藤直吉、内田ナカ、生形サト、生形千代子、梅沢トモ子、小賀野フジ、酒井春子、沢本アイ子、沢本アヤ子、沢本スミ江、関根喜久枝、関根喜久子、関根トヨ、戸沢ミチ子、中 ツヤ、中 照子、野本キク江、野本ミチ子、山田松枝、渡辺フミ子、渡辺裕子、

このほか、下記の方々にも整理作業にご協力いただいた。

池田芳野、福島恵美子、渡辺久美代

目 次

序

例 言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯と経過 1

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境 5

第Ⅲ章 遺跡の概要 11

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物 13

第1節 竪穴式住居跡 13

第2節 掘立柱建物跡 37

第3節 土 壙 39

第4節 溝 跡 40

第5節 その他の出土遺物 41

第Ⅴ章 ま と め 42

参 考 文 献 44

写 真 図 版

挿 図 目 次

第1図	県営ほ場整備事業児玉南部地区 昭和62年度工区位置図……………1	第25図	第9号住居跡出土砥石……………23
第2図	昭和62年度工区発掘調査位置図……………3	第26図	第9号住居跡出土土器……………23
第3図	ほ場整備終了後の地割りと発掘 調査位置……………4	第27図	第10号住居跡……………24
第4図	周辺の主要古代遺跡(7世紀後半以降)……………6	第28図	第11号住居跡……………25
第5図	女堀川中流域地形模式図……………7	第29図	第11号住居跡出土土器……………26
第6図	飯玉東・雷電下・根田遺跡全体図……………9・10	第30図	第12号住居跡……………27
第7図	根田遺跡全測図……………12	第31図	第13号住居跡……………27
第8図	第1号住居跡……………13	第32図	第14号住居跡……………28
第9図	第2号住居跡……………14	第33図	第14号住居跡出土土器……………28
第10図	第2号住居跡カマド……………14	第34図	第15・16号住居跡……………30
第11図	第2号住居跡出土土器……………14	第35図	第16号住居跡……………31
第12図	第3号住居跡……………15	第36図	第16号住居跡出土土器(1)……………32
第13図	第3号住居跡出土土器……………15	第37図	第16号住居跡出土土器(2)……………33
第14図	第4・5号住居跡……………16	第38図	第17・18号住居跡……………34
第15図	第4号住居跡出土土器……………17	第39図	第17号住居跡出土土器……………34
第16図	第4号住居跡カマド……………17	第40図	第18号住居跡出土土器……………35
第17図	第5号住居跡カマド……………17	第41図	第19号住居跡……………36
第18図	第6号住居跡……………18	第42図	第19号住居跡カマド……………36
第19図	第6号住居跡カマド……………19	第43図	第19号住居跡出土土器……………37
第20図	第6号住居跡出土土器……………20	第44図	第1号掘立柱建物跡出土土器……………37
第21図	第7・8号住居跡……………21	第45図	第1号掘立柱建物跡……………38
第22図	第8号住居跡出土土器……………21	第46図	第2号掘立柱建物跡……………39
第23図	第9号住居跡……………22	第47図	第1号土甕……………39
第24図	第9号住居跡カマド……………22	第48図	第1号溝……………40
		第49図	根田遺跡出土縄文土器……………41
		第50図	根田遺跡出土弥生土器……………41

発掘調査組織(昭和62年度当時)

主 体 者	児玉町教育委員会
	教 育 長 石 井 栄 一
事 務 局	児玉町教育委員会社会教育課
	課 長 中 林 重
	係 長 前 川 由 雄
	主 事 金 子 幸 弘
	主 事 鈴 木 徳 雄
	主 事 小 茂 田 早 苗
調査担当	主 事 恋 河 内 昭 彦

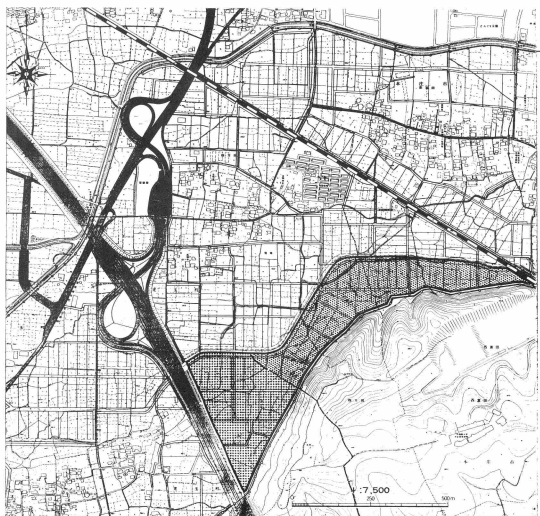
報告書刊行組織(平成元年度)

主 体 者	児玉町教育委員会
	教 育 長 野 口 敏 雄
事 務 局	児玉町教育委員会社会教育課
	課 長 吉 川 豊
	課長補佐 立 花 勲
	係 長 前 川 由 雄
	主 任 金 子 幸 弘
	主 事 鈴 木 徳 雄
	主 事 洪 谷 路 子
	主 事 恋 河 内 昭 彦

第Ⅰ章 発掘調査の経緯と経過

県営ほ場整備事業児玉南部・北部地区は、「地区内における農耕上の種々なる悪条件を改善する為、ほ場整備を実施し耕地の集団化を図り、大ほ場として近代機械化産業の導入により労力の節減を図ると共に農業経営の合理化を図る」ことを目的として、女堀川中流域の兩岸に広がる約500haの水田を対象に、昭和60年度より事業が実施されている。事業地区は、対象面積が広く、また用排水系統が異なることから、女堀川を境にして左岸北側を児玉北部地区、右岸南側を児玉南部地区の大きく2地区に分けられている。児玉南部・北部地区とも児玉町と本庄市にまたがっており、児玉北部地区は上流の児玉町側から下流の本庄市に向かって施工し、児玉南部地区は反対に下流の本庄市側から上流の児玉町に向かって年度工区毎に施工している。

県営ほ場整備事業児玉南部地区は、女堀川右岸に広がる約360haの耕地のうちの水田を主体とする315haを対象にしている。昭和60年度と61年度は本庄市内が対象であったが、昭和62年度工区より児玉町の一部がその対象に加わるようになった。昭和62年度工区は、上越新幹線と関越自動車道



第1図 県営ほ場整備事業児玉南部地区昭和62年度工区位置図

に挟まれた地域内に位置し、男堀川改修路より南側の大久保山（浅見山）西側緩斜面に沿った細長い工区である。工区の面積は、水田と畑地の一部を合わせて約19haあり、そのうちの約6haが児玉町分に該当している（第1図）。

昭和61年10月、昭和62年度工区の事業計画をある程度策定した事業実施主体者の埼玉県本庄土地改良事務所より、昭和62年度工区内における埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に事前協議があった。児玉町教育委員会では工区内の児玉町分について遺跡地図と現地を確認した結果、工区内には周知の埋蔵文化財包蔵地である児玉町№2遺跡（雷電下遺跡・根田遺跡）と№286遺跡（飯玉東遺跡）が存在しており、その包蔵地内を現状変更する場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨を本庄土地改良事務所に回答し、あわせて事業の性格上包蔵地内の現状変更はある程度やむをえないものの、できるかぎり計画変更をも考慮して最小限度の範囲に止どめるよう要望した。

これより本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会の担当者間で、その保存処置について細部にわたる協議を継続的に行った結果、包蔵地範囲内を通る小排水路部分約600㎡の外に、現水田面に突出する飯玉東遺跡の全部約1600㎡と雷電下遺跡・根田遺跡の北端部約2200㎡については、事業目的からしてどうしても水田化のために削平しなければならないことから、やむをえずこれらの包蔵地内における現状変更部分約4400㎡を発掘調査により記録保存することになった。そしてこの協議結果をもとに、埼玉県教育局文化財保護課と埼玉県農林部耕地課を交えて、調査区域や調査期間及び調査経費の負担区分等の調整を行い、飯玉東遺跡の発掘調査と児玉条里の確認調査を文化財側が負担し、根田遺跡と雷電下遺跡の発掘調査を農政側が費用負担することになり、県営ほ場整備事業児玉南部地区昭和62年度工区に伴う埋蔵文化財保存事業の実施計画がほぼ確定した。

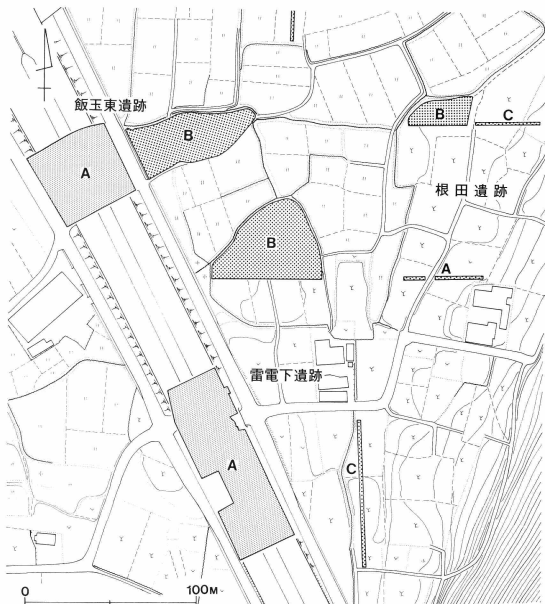
しかしその後、地元土地改良区から工区内の大久保山西側緩斜面部の畑地帯について、現状では傾斜がきつく農作業に支障をきたしているため、大幅な切り盛り工事を行って平坦な耕地にしてほしいという強い要望が示された。このため本庄土地改良事務所では工事計画の変更を検討するにあたって、まず工区内の緩斜面部がすべて児玉町№2遺跡の包蔵地範囲に該当することから、切り盛り造成が実施可能かどうか児玉町教育委員会に意見を聞くとともに、緩斜面部の遺構の埋蔵状態を明らかにすべく試掘調査を依頼された。

この大久保山西側緩斜面部（根田遺跡）は、その東側の山際においては小礫を含む二次堆積土の被覆が見られるが、ほぼその全域にわたって土器片の散布が顕著に認められることから、多くの遺構の存在が十分に予想されるところであった。そのため児玉町教育委員会は、遺跡破壊に及ぶ大幅な切り盛り造成の実施にあたっては、事前に記録保存のための発掘調査の実施が必要であるが、約20000㎡にも及ぶ緩斜面部造成予定区域の発掘調査を、当初計画の4400㎡とともに単年度で終了させることは、予算・期間・調査体制のあらゆる面から見て、現状ではまったく不可能であることを説明し、当初の計画どおり遺跡を損なわない地なり整地（表土扱い）にするよう要望した。また、試掘調査については、現地の大部分が養蚕用の桑畑であり、遺構の確認や分布を明らかにする明細な試掘調査が実施困難であることから、緩斜面部の全域に1m×50cmの試掘坑を24箇所桑を損なわないように設定し、それぞれについて土層観察を行い、遺構の包蔵状態を調べることにした。そし

て地点毎に遺構確認面までの深さを明記した土層柱状図を作成して試掘調査の結果とともに提出し、遺構確認面にまで及ぶような掘削はしないよう再度事務所に要望した。

これにより本庄土地改良事務所は、工事計画と文化財保存の両面から検討した結果、最終的に工事計画上からも大幅な切り盛り造成は不可能であると判断したが、地元の要望も考慮して、二次堆積土が顕著で傾斜のきつい山際の斜面西側は、多少なりとも傾斜を緩やかにするために、遺構確認面に及ばない範囲内での小規模な削平を実施したいという連絡を受け、児玉町教育委員会もこれを了解した。

かくして、懸案事項も解決し、当初の計画どおり発掘調査が実施される運びとなり、工事主体者

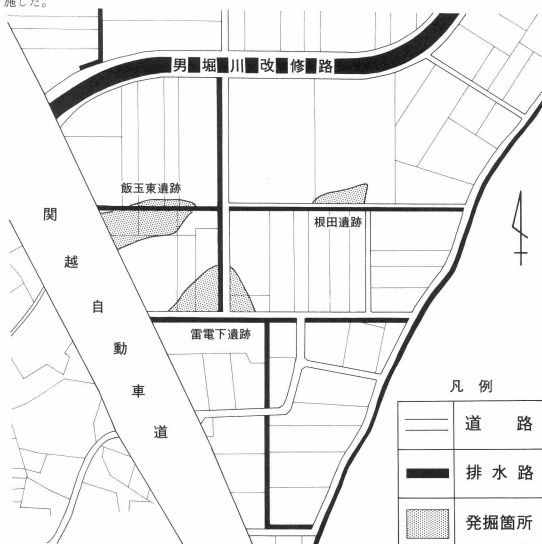


第2図 児玉南部地区昭和62年度工区発掘調査位置図

の埼玉県本庄土地改良事務所より昭和62年3月20日付け本地第2252号による発掘通知が、発掘調査を実施する児玉町教育委員会より昭和62年4月1日付け児教社第1号による発掘調査通知がそれぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出された。

なお、文化庁からは昭和62年7月10日付け委保記第2-2076号による発掘調査通知の受理について通知があり、埼玉県教育委員会からは昭和62年4月27日付け教文第2-4号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の指示が、埼玉県本庄土地改良事務所に通知された。

現地での発掘調査は、昭和62年5月28日から10月30日までの約5ヵ月の期間を要して実施し、まず文化財側の費用負担による飯玉東遺跡B地点の発掘調査と児玉条里の確認調査を行った。農政側の費用負担による雷電下遺跡B・C地点と根田遺跡の発掘調査は、児玉町（町長小柏儀一）と埼玉県（県知事畑和）の間で発掘調査の委託契約を締結し、飯玉東遺跡B地点の調査に継続して実施した。



第3図 ほ場整備終了後の地割りと発掘調査位置

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

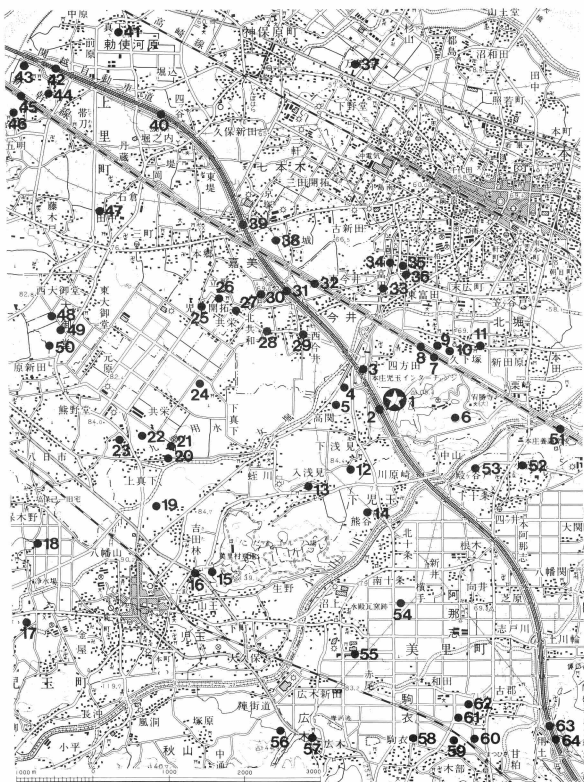
本遺跡は、児玉町北東端の女堀川中流域右岸にある大久保山（浅見山）丘陵の西側緩斜面部に位置する。本遺跡が立地する大久保山丘陵は、児玉町の南側半分を占める上武山地より断層線の八王子―高崎構造線によって分離された児玉丘陵に属すが、河川の開析作用によって山地ぎわの丘陵部と分断されて、南東側の生野山や鷺山とともに低地内に列状に存在する残丘を形成している。この大久保山は、近世以前より周辺の村々の入会地として盛んに利用された山で、現在では本庄市・児玉町・美里町の1市2町がまたがり、本庄市側が大久保山、児玉町側が浅見山あるいは東山、美里町側が塚本山とそれぞれ別々の名称で呼んでいる。

本遺跡の前面には、その中央を流れる女堀川によって開析された広い女堀川沖積低地の水田地帯が開けており、ほ場整備施工以前にはそのほぼ全域において連続する一町四方の条里形地割りが比較的明瞭に残存していた。この女堀川右岸の水田地帯は、群馬県との県境である神流川から引き入れた九郷用水の水系に属する女堀川より児玉町大字高岡で分水する男堀川によって灌漑されている。男堀川は、現在ほ場整備に伴って改修されてそれ以前とは流路が若干異なったが、かつては女堀川より分水された後、東牧西分遺跡（第4図No.5）が所在する自然堤防を大きく南側に迂回し、それから低地内を部分的に条里坪線に沿いながら階段状に北東方向に流路を取り、本庄市の東富田で観音堀により窪田堀を分水し、さらに東流して小山川に合流した。この男堀川は、明治頃は地元の浅見では「浅見堀」あるいは「中カ堀」と呼ばれており、高岡・浅見地内では「地神堀」・「境堀」・「戌亥堀」・「中堰」の四つの水揚げ堰が存在し、それによって各水田に分水されていた。

この女堀川に沿って带状に広がる女堀川沖積低地は、旧児玉郡における農業生産の中心的基盤をなした地域である。このことを反映して、低地西側の本庄台地縁辺や低地内の自然堤防上及び低地東側の残丘上とその縁辺の台地上には、各時代にわたって数多くの集落遺跡が存在し、また、低地内では一町四方の条里形地割り（児玉条里遺跡）や古代から現代まで重層的に続く水田層とともに、各時代の灌漑・排水に使用された溝跡等の開発の痕跡が多数確認されている。

女堀川沖積低地が本格的に開発され始めるのは、古墳時代になってからであり、前時代の弥生時代に比べると遺跡数が爆発的に増加し、特にそれは本遺跡が所在する女堀川中流域に顕著に認められる。当地域には大久保山遺跡（荒川他1986）・塚本山遺跡（増田他1978）・飯玉東遺跡（駒宮他1979）・生野山遺跡（菅谷・駒宮1973）など弥生時代後期の住居跡が検出された遺跡がいくつか存在するが、これらは児玉地方の他地域の該期遺跡と同様に、低地内の丘陵部を中心に立地している。現在までのところ低地内からは該期の遺構がまったく検出されていないことから、これらの遺跡が女堀川沖積低地の開発を対象としていたものではなく、丘陵内の小規模な谷田を生産基盤としていたものが主体であったことが推測される。

このような前時代の状況の後、古墳時代の前期中葉には自然堤防上の大集落である後張遺跡を中心に、本庄台地側に塚島遺跡A地点（注1）や諏訪遺跡、自然堤防上に下田遺跡や七色塚遺跡、残丘上や縁辺の台地上に雷電下遺跡や城の内遺跡（鈴木他1981）などの比較的規模が小さいと思われる集落が形成される。また、前期後半から中期には、灌排水用の溝が低地内のいくつかの遺跡で検出されており、低地内の開発が積極的に行われていたことが窺える。このような自然堤防上の大



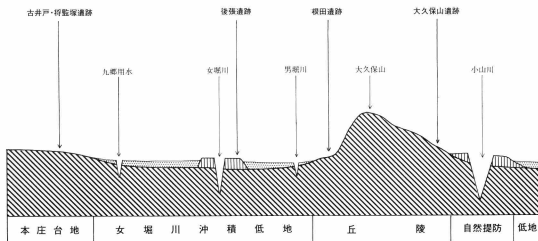
第4図 周辺の主要古代遺跡(7世紀後半以降)

集落を中心とする遺跡群の構成は、概ね古墳時代の後期前半まで見られ、後期後半には自然堤防上の大集落が衰退し、沖積低地の周辺に拡散居住するようになる。

奈良時代には、当地域は律令国家における地方行政組織の武蔵国児玉郡に編成される。この古代児玉郡には、武蔵国二の宮の明神大社という高い社格をもつ金鎖神社（現神川町二の宮）や児玉古窯跡群内の金草窯跡出土の軒丸瓦と同范瓦をもつ城戸野庵寺（現神川町新宿）などの注目すべき寺社や承平3年(933年)に勅旨牧になった阿久原牧（現神泉村阿久原）があるが、郡内の政治・経済・交通の中心である肝心の児玉郡衙の所在地は現在のところ明らかではない。また、古代児玉郡は岡太郷・振太郷・太井（大井）郷・草田郷の4郷からなる下郡であるが、これらの郷の郡内における位置には諸説があり、本遺跡を含む当地域がこのうちのどの郷に属していたかも明確ではない。

当地域における該期の様相は、女堀川沖積低地のほぼ全域にわたって一町四方の連続する条里形地割りが施工され、集落跡は梅沢遺跡や東牧西分遺跡など自然堤防上にもいくつか小規模な集落が存在するが、沖積低地の水田地帯を取り囲むように、西側の本庄台地縁辺や東側の残丘縁辺に多くの集落が形成される。これらの集落は、7世紀後半から進出し始め、概ね8世紀から9世紀にわたって盛興する。特に本庄台地縁辺の集落は、本庄市西富田から児玉町上真下にかけて、集落相互に遺構分布の粗密や空地を有しながらも、帯状に連続するような様相を示し、それらの後背部の台地上には低地内の灌排水用の水路とは異なる用途が推測されている真下大溝（赤熊他1989、鈴木1989）が掘削されていることから、該期には沖積低地の組織的な大規模開発とともに、それまで開拓があまり進んでいなかった本庄台地の開発も積極的に行われていたことが伺われる。このような7世紀末から8世紀前半における当地域の大規模開発は、言うまでもなく個々の集落単位で実施できるものではなく、児玉郡あるいは武蔵国レベルのプロジェクトであることが容易に推測され、当然それらは律令国家成立期の国家的政策と密接にかかわっているものと思われる。

注1. 児玉町教育委員会が、昭和62年度県営ほ場整備事業児玉北部地区に伴って発掘調査を実施し、担当者の鈴木徳雄氏の御教示によると、古墳時代前期の住居跡3軒が検出されている。

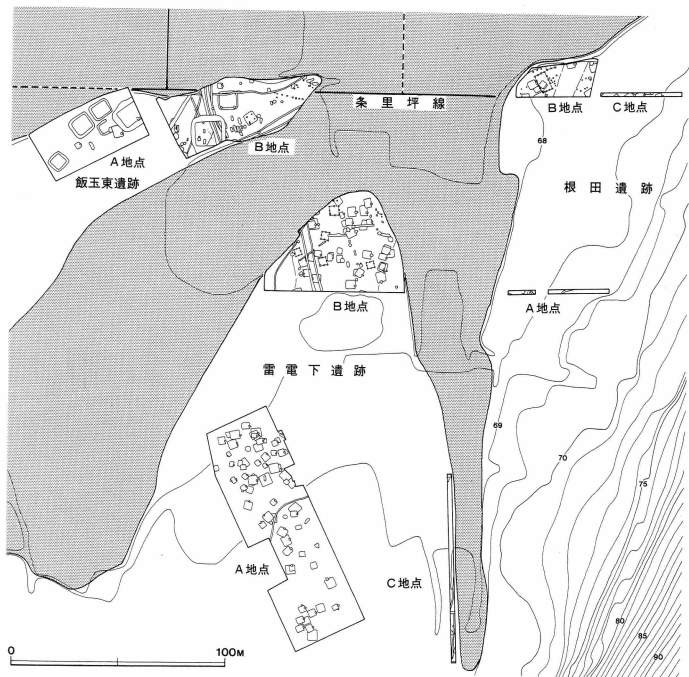


第5図 女堀川中流域地形模式図

注2. 児玉町教育委員会が、町道蛭川・上真下線の拡幅舗装工事に伴って立会調査を行い、古墳時代後期の住居跡2軒と平安時代の羽釜を伴う住居跡3軒を確認した。

周辺の主要古代遺跡(7世紀後半以降)

No.	遺 跡 名	備 考	No.	遺 跡 名	備 考
1	根 田	本報告	33	社 具 路	長谷川他1987
2	雷 電 下	駒宮他1979、恋河内1990	34	夏 目	長谷川他1985
3	後 張	立石他1982	35	薬 師	本庄市1976
4	梅 沢	赤熊1985	36	南大通り線内	増田1988・1989
5	東 牧 西 分	児玉町が1988年に調査	37	石 神 境	長谷川勇氏の御教示
6	大 久 保 山	荒川他1980	38	下 廊	石岡他1978
7	下 田	柿沼他1979、増田1988	39	本 郷 東	駒宮他1976
8	観 音 塚	増田1988	40	中 堀	駒宮他1978
9	元 富	増田1988	41	前 原	丸山1987
10	七 色 塚	増田1988	42	若 宮 台	大和他1983
11	久 下 東	増田1985	43	臺	中村他1980
12	鷺 山 南	児玉町が1983年に調査	44	五 明 廃 寺	外尾1987
13	新 屋 敷	児玉町が1989年に調査	45	天 神 林	昼間他1983
14	宮 ヶ 谷 戸	美里町が1983年に調査	46	東 猿 見 堂	外尾常人氏の御教示による
15	阿 知 越	鈴木他1983・1984	47	田 中 前	市川1977
16	御 林 下	駒宮他1977	48	女 堀	菅谷他1976
17	枇 把 橋	駒宮1973	49	檜 下	菅谷他1976
18	十 二 天	鈴木他1981	50	皂 樹 原	篠崎他1986・1987
19	樋 越	児玉町が1988年に調査	51	古 川 端	小久保他1978
20	上 真 下 東	注2	52	向 田	細田他1984
21	坊 田	児玉町が1986年に調査	53	村 後	細田他1984
22	辻 ノ 内	児玉町が1985年に調査	54	鳥 森	菅谷他1980
23	真 下 境 東	鈴木他1989	55	宮 下	菅谷他1976
24	将監塚・古井戸	井上他1986、赤熊他1989	56	諏 訪 平	児玉町が試掘を実施
25	立 野 南	赤熊他1985	57	蛭 薊 神 社 前	中村他1980
26	八 幡 太 神 南	赤熊他1985	58	北 貝 戸	菅谷他1977
27	熊 野 太 神 南	赤熊他1985	59	畑 中	谷井1979
28	今 井	赤熊1985	60	北 谷 戸	菅谷他1979
29	北 廊	赤熊1985	61	下 道 堀	菅谷他1979
30	往 来 北	外尾常人氏の御教示による	62	上 耕 地	菅谷他1979
31	久 城 前	駒宮他1978	63	清 水 谷	中島他1981
32	諏 訪	柿沼他1979	64	北 坂	中島他1981



第6圖 飯玉東・雷電下・根田遺跡全体図

第三章 遺跡の概要

本遺跡は、『埼玉県遺跡地図』記載の周知の埋蔵文化財包蔵地である「児玉町Na2遺跡」に該当し、遺跡名はその所在する小字名をとって「根田遺跡」と呼称する。

本遺跡が立地する大久保山（浅見山）西側斜面は、斜面の傾斜度の違いによって、東側山寄りの急斜面部と西側の水田に面する緩斜面部に分けられ、本遺跡は西側の標高68mの緩傾斜面に立地している。遺跡の保存状態は、遺跡東側の急斜面に近い方（A地点東側・C地点）では、斜面上方からの二次堆積土が遺構上面を被覆しているため、比較的良好であるが、遺跡西側の水田面に近い方（A地点西側・B地点）では、耕作による削平がハードローム層にまで達しているため、保存状態が極めて悪く、かろうじて遺構の痕跡を止めている程度のもものがほとんどである。

発掘調査は、小排水路部分（A・C地点）と削平部分（B地点）の3地点について行った。調査範囲が狭いため遺構の全容が解るものは少ないが、奈良・平安時代の集落跡を中心とする比較的多くの遺構が検出されている。検出された遺構は、竪穴式住居跡19軒・掘立柱建物跡2棟・土壇3基・溝跡2本・ピット多数であるが、これらの多くは、本遺跡北側のB・C地点から検出されており、特にC地点では、調査範囲が狭いにもかかわらず、その検出した遺構の密度はかなり高い。また、B地点の中央部には、南西から北東方向に開析する浅い埋没谷が存在するが、これは古墳時代後期に埋没が進み、奈良時代にはほとんど埋没は完了している。

竪穴式住居跡は、A地点で2軒、B地点で9軒、C地点で8軒検出されている。時期は、C地点で古墳時代中期和泉式後半の住居跡が1軒（第14号住居跡）検出されているが、そのほかの住居跡はすべて奈良・平安時代のものである。これらの住居跡は、いずれも住居の主軸方位を北東から東の方向にとり、カマドもその方角の壁に付設されている。周溝・柱穴・貯蔵穴といった住居内の施設をもったものは少なく、周溝は第9・10・14号住居跡に、柱穴は第10号住居跡に、貯蔵穴は第3・4号住居跡に見られるだけである。

掘立柱建物跡は、B地点で2棟確認されているが、第1号掘立柱建物跡は3間×4間と比較的規模の大きいものである。このほかにC地点の西端部（第12・13号住居跡付近）にも柱穴状のピットが多数見られ、調査範囲の関係からそのプランは明確ではないが、掘立柱建物跡の柱穴の一部の可能性がある。B地点の第1・2号掘立柱建物跡は、いずれも建物跡の主軸方向を北西にとり、梁行を同一線上に揃えていることから、相互に密接な関係が伺えるが、周辺の住居跡より時期が新しいため、竪穴式住居跡とはセットにならないようである。

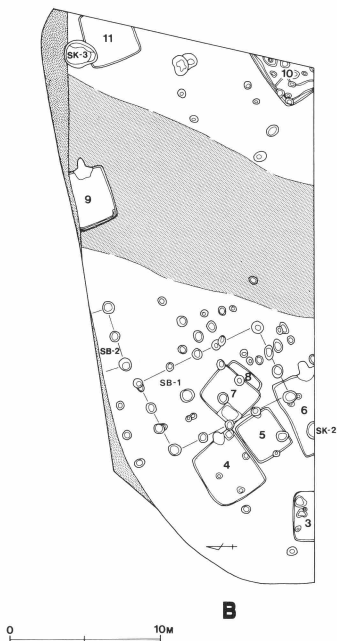
土壇は、A地点で1基（第1号土壇）、B地点で2基（第2・3号土壇）確認されているが、形態は様々で、その時期や性格を明らかにすることはできなかった。

溝跡は、A地点で2本規模の小さい溝が確認されている。その時期や性格は明らかではないが、いずれも古代にさかのぼる可能性が高いもので、流水の痕跡が見られないことから、何だかの区画のための溝であったかもしれない。

出土遺物は、住居跡を中心とする各遺構から土器が出土している。土器は土師器が主体であるが、破片のものが多く、良好な一括資料は少ない。須恵器は少数であるが、南比企産のものが2点ある。このほか、縄文時代中・後期、弥生時代中・後期、古墳時代前・後期の土器片も少量出土している。



A



C

第7図 根田遺跡全測図

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

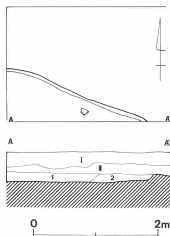
第1節 竪穴式住居跡

第1号住居跡（第8図、図版1-2）

本住居跡は、A地点の西端に位置し、東側7mには第2号住居跡がある。調査範囲が狭いため、住居の北側壁の一部を検出したに止どまり、その全容は不明である。遺存状態は、耕作が深くまで及んであり、あまり良好とは言えない。

床面は、あまり凹凸はなく平坦で水平をなし、比較的堅緻である。壁は、北側壁で8cm～15cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。覆土は以下の2層に分かれるが、本住居跡の埋没状態は不明である。

出土遺物は、非常に少なく、覆土中より土器片が少量出土しただけである。



第8図 第1号住居跡

第1号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗褐色土層（白色粘土粒子・焼土粒子を均一に・ローム粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2号住居跡（第9・10図、図版2-1・2）

本住居跡は、A地点の西側中央寄りに位置し、西側7mには第1号住居跡が、東側2mには第1号土壇がある。住居の西側壁を第2号溝によって切られているが、遺構の遺存状態は良好である。

調査範囲が狭いため、本住居跡の全容は不明であるが、検出した北側壁・東側壁及び北東コーナー部より、本住居跡の平面形は正方形もしくは長方形を呈するものと思われる。主軒方位はおおよそN-31°-Eをとるとと思われる。規模は、北西から南東方向は2.40m、北東から南西方向は1.62mまで調査区内で測れる。

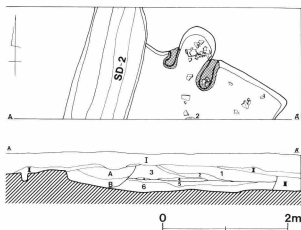
床面は、ローム層を掘り込んで構築しており、ローム粒子やロームブロックを含む暗褐色土（第6層）を埋め戻し、その上に黒褐色土（第5層）を突き固めた貼り床である。全体的に平坦であるが、住居中央部に比べ壁際がやや高くなっている。住居中央部は比較的堅緻であるが、壁際の周辺部はやや軟弱である。壁は、北東側・南東側壁とも垂直ぎみに立ち上がり、壁高は15cm～23cmである。壁溝や柱穴等の住居内施設は、検出した部分では認められなかった。

覆土は、4層に分かれ、それぞれ比較的明瞭な不連続層をなしているが、その堆積状態は住居東側からの流入が顕著である。

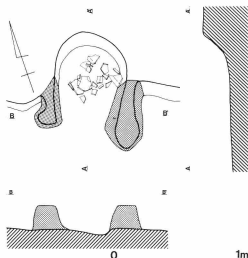
カマドは、住居の北東側壁の中央付近に住居壁を掘り込んで作られている。規模は、全長88cm・最大幅86cmを測り、軸線はN-26°-Eを向いている。袖は黄白色粘土によって住居壁から張り付けて作られており、燃焼部は住居の床面をあまり掘り込まず、床面とほぼ平らになっている。

出土遺物は、カマド内や覆土中より土器破片が多数出土しているが、その出土状態において、器形が同えるものはなかった。図示できたものは甕3点である。Na1はカマド右袖上面より出土し、

本住居跡に伴うと思われるものである。Na 2 と 3 は、いずれも覆土上層の第 1 層中から出土しており、住居跡廃絶後に混入したものと考えられる。



第 9 図 第 2 号住居跡



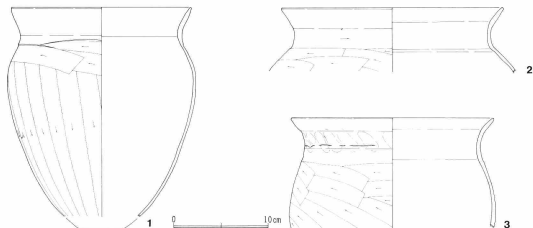
第10図 第2号住居跡カマド

第 2 号住居跡土層説明

- 第 1 層：暗褐色土層（黄白色粘土ブロック・粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第 2 層：暗黄白色土層（黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第 3 層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第 4 層：暗茶褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 5 層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第 6 層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、ロームブロックを微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第 2 号溝土層説明

- 第 A 層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第 B 層：暗褐色土層（ロームブロックを微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



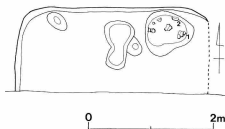
第11図 第2号住居跡出土土器

第2号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	甕	口縁部径 (19.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、胴部上半に最大径を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向・下半縦方向のケズリ、内面ナデ。	白色粒・赤色粒 ⑨⑩—暗茶褐色	残存率約1/4
2	甕	口縁部径 (23.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「コ」の字に近い形状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向のケズリ、内面ナデ。	白色粒・赤色粒 ⑨⑩—暗茶褐色 ⑪—暗茶褐色	残存率 口縁部1/4破片
3	甕	口縁部径 (21.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「コ」の字に近い形状を呈し、外面指頭圧痕あり。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向のケズリ、内面ナデ。	白色粒 ⑨⑩—暗橙褐色 ⑪—暗褐色	残存率 口縁部1/4破片

第3号住居跡（第12図、図版3—2）

本住居跡は、B地点の西端部に位置し、北側約2.5mには第4号住居跡が、東側約2.5mには第6号住居跡がある。住居の南側半分は調査区外のため、住居の全容は不明である。耕作による削平が著しく、住居跡の北壁と東壁がかなりうじて残存している程度で、遺構の遺存状態は極めて悪い。



第12図 第3号住居跡

平面形は、調査区内で確認した部分から推測すると、正方形もしくは長方形を呈すと思われる。規模は、東西方向は推定で3.14m、南北方向は1.41mまで測れる。壁高は、西壁で4cm、北壁で3cmである。主軸方位はN—90°—Eをとる。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を、ほぼ水平に埋め戻した貼床式である。全体に軟弱で、細かな凹凸が見られる。

住居内からは、北壁際にビットが3箇所検出されているが、本住居跡に伴うと考えられるものは、一番東側の不整形円形を呈する小土塊状のビットだけであり、その形態より貯蔵穴の可能性が高いと思われる。

出土遺物は、遺構の遺存状態を反映して非常に少なく、図示できたものは貯蔵穴内から出土した甕(1)と坏(2)だけである。



第13図 第3号住居跡出土土器

第3号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形方法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	甕	口縁部径 (24.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや強く外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向のケズリ、内面ナデ。	白色粒・角閃石 ⑨⑩—橙褐色	残存率 口縁部1/4破片
2	坏	口縁部径 (17.0cm)	口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。	白色粒・赤色粒 ⑨⑩—淡橙褐色	残存率 口縁部1/4破片

第4号住居跡（第14・16図、図版4-1・2）

本住居跡は、B地点の西側に位置し、第5号住居跡や第7号住居跡が近接している。耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良くない。

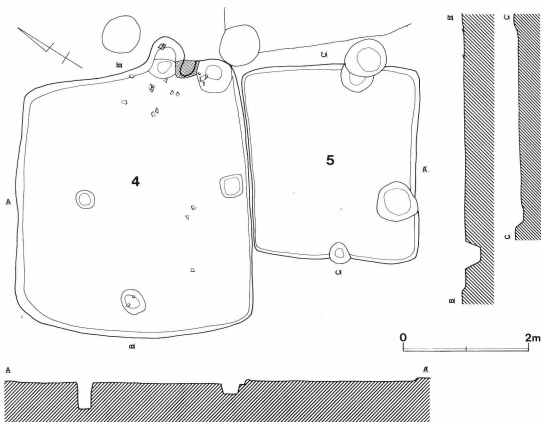
平面形は、やや不整の長方形を呈し、規模は北東から南西方向4.36m、北西から南東方向3.72mを測る。壁高は、南東壁で8cm・南西壁で5cm・北西壁で3cm・北東壁3cmある。主軸方位は、N-56°-Eをとる。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を若干埋め戻した貼床式である。比較的平坦で水平をなすが、全体にやや軟弱である。貯蔵穴は、カマド南東側の住居東側コーナー部にあり、56cm×55cmの不整円形を呈す。床面からの深さは33cmあり、底面は小さいが平坦をなす。

住居内には他に3箇所ピットが検出されているが、本住居跡に伴うと考えられるものは、南西壁際の中央部に位置するものだけであり、他は覆土中に浅間山系A軽石を含む後世のものである。

カマドは、北東壁の中央からやや南東に寄った位置に、壁を掘り込んで作られている。全長68cm・最大幅83cmを測るが、左袖は残存していない。袖は、床面上に白色粘土を盛り上げ、壁に貼り付けて構築されている。燃烧部及び袖の内面は、あまり良く焼けていない。燃烧部の掘り方は、中央部が底面より約20cmピット状に深くなったやや特異な形態を呈している。

出土遺物は、比較的少なく、カマド周辺の床面付近から土器片がわずかに出土しただけである。

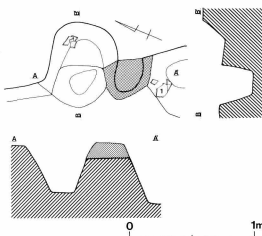


第14図 第4・5号住居跡

図示できたものは、貯蔵穴内の覆土中より出土した土師器皿1点だけであるが、本住居跡から出土した甕の破片は、すべて古相の「コ」の字状口縁を呈する甕であり、図示した皿も末期的な形態であることから、これらの甕と共伴するものと考えられる。



第15図 第4号住居跡出土土器



第16図 第4号住居跡カマド

第4号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形方法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	皿	口縁部径 (15.2cm) 器 高 2.6cm	体部は浅く平底ぎみの形状を呈し、口縁部は短く強く外反する。	口縁部外面ヨソナデ。体部外面上半ナデ、下半ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内面—淡橙褐色	残存率約8%

第5号住居跡（第14・17図、図版5—1）

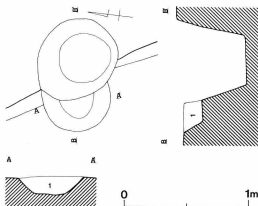
本住居跡は、B地点の西側に位置し、北西側に第4号住居跡・北東側に第7号住居跡・南東側に第6号住居跡が近接している。耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良くない。住居北東壁とカマドの一部を第1号掘立柱建物跡の柱穴に切られ、また南東壁と南西壁の一部を後世のピットによって切られている。

平面形は、やや歪んだ長方形を呈している。規模は、北東から南西方向3.13m、北西から南東方向2.80mを測る。壁高は、南西壁と南東壁が4～6cm、北東壁と北西壁が2～4cmある。主軸方位は、N-54°-Eをとる。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色を若干埋め戻した貼床式である。平坦で水平をなすが、全体にやや軟弱である。

カマドは、北東壁の中央からやや南東寄りの位置に、壁を掘り込んで作られている。カマドの半分を第1号掘立柱建物跡の柱穴によって破壊されているため、その全容は不明である。軸はなく、燃焼部の掘り方のみ残存している。掘り方は、住居の床面より15cm掘り込まれており、焼土粒子・ローム粒子・ロームブロックを均一に含む黒褐色土（第1層）によって埋め戻されている。

出土遺物は、土器の小破片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。



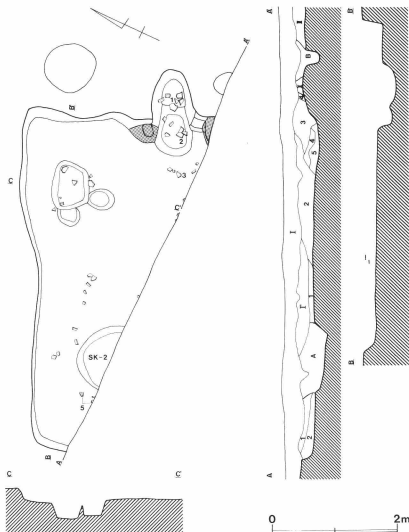
第17図 第5号住居跡カマド

第6号住居跡（第18・19図、図版6—1・2）

本住居跡は、B地点の西側に位置し、北側に第5号住居跡と第7・8号住居跡が近接している。住居内の一部を第1号掘立柱建物跡の柱穴と第2号土壇によって切られているが、遺構の遺存状態は比較的良好である。住居の南側半分は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で確認された部分から推測すると、壁のプランがやや蛇行しているが、正方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、北東から南西方向が5.48m、北西から南東方向は3.10mまで測れる。壁高は、北東壁で最高33cm、南西壁で最低15cmある。主軸方位は、N-65°-Eをとる。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色を若干埋め戻した貼床式である。全体に水平で、やや凹凸が見られる。住居中央部は比較的堅緻であるが、壁に近い周辺部はやや軟弱である。



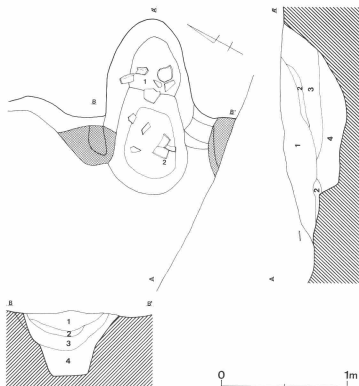
第18図 第6号住居跡

第6号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：暗褐色土層（白灰色粘土粒子・焼土粒子・ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：暗白灰色土層（白灰色粘土ブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第5層：暗褐色土層（白灰色粘土粒子・ローム粒子を多量に含む。粘性・しまりともない。）

第A層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第B層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、白色粒を微量に含む。粘性・しまりともない。）



第19図 第6号住居跡カマド

住居内からはピットが2箇所検出されているが、第1号掘立柱建物跡の柱穴南側にあるピットは深さが21.5cmあり、その位置から本住居跡の主柱穴の可能性が高い。その他の住居内施設は、まったく確認されなかった。

カマドは、本住居跡の北東壁の中央付近に、壁を掘り込んで作られている。規模は、全長140cm・幅は135cmまで測れ、軸は北東壁に対してほぼ直角である。袖は、黄白色粘土を床面上に盛り上げて作っているが、粘土を燃焼部の奥まで回さず、壁に直接貼り付けて構築している。右袖は、燃焼部掘り方に接せず、やや外側に離れている。燃焼部及び袖の内面は良く焼けている。

出土遺物は、住居跡のカマド内や覆土中より、比較的多くの土器片が出土している。図示できたものは、甕2個体と壊3個体である。Na 1とNa 2の甕は、カマド内から出土したもので、Na 1は燃焼部上面より、Na 2は焚き口付近から検出されている。Na 3と4の土師器坏は、いずれも覆土中から出土した破片である。Na 5の須恵器坏は、住居西側コーナー部付近の覆土上層から出土している。

第6号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 24.1cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部はやや内反り状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向・下半斜方向ケズリ。内面ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 ⑤⑥一暗茶褐色	残存率 口縁部片破片
2	甕	口縁部径 (22.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は内反り状に短く立つ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向・下半斜方向ケズリ。内面ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 ⑤⑥一暗茶褐色	残存率 口縁部片破片

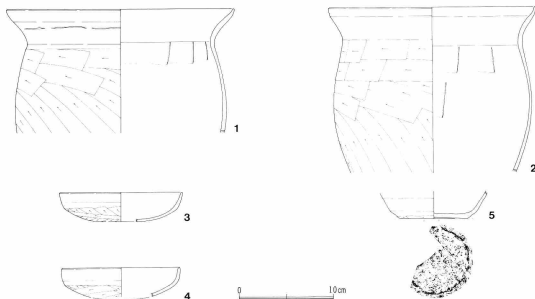
第6号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（黄白灰色粘土ブロックを均一に、焼土粒子・焼土ブロックを微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：赤褐色土層（焼土層）

第3層：暗赤褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第4層：暗黄褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を均一に、ローム粒子・焼土ブロックを微量に含む。粘性・しまりともない。）



第20図 第6号住居跡出土土器

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
3	環	口縁部径 (13.0cm) 器 高 3.1cm	体部はやや浅めの丸底を呈し、口縁部はやや外方に長く立つ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ。内面ナデ。	白色粒 ⑨外一暗橙褐色	残存率約1/4
4	環	口縁部径 (12.3cm)	体部はやや浅めの丸底を呈すと思われ、口縁部はやや長く直立ぎみに立つ。	口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。	白色粒 ⑨内一淡茶褐色	残存率 口縁部片破片
5	須恵器 環	底 部 径 7.0cm	口クロ成形。底部と体部の境はくぼみ、体部は直線的に外傾する。	体部内外面回転ナデ。底部外面糸切りの後、手持ちヘラケズリ。	片岩粒・角閃石 ⑨一灰色 ⑨内一淡灰褐色	残存率 底部1/4

第7号住居跡（第21図、図版5-1）

本住居跡は、B地点の調査区西側に位置し、西側に第4号住居跡、南西側に第5号住居跡、南側に第6号住居跡が近接して存在している。耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良くない。本住居跡の西側コーナー部を第1号掘立柱建物跡の柱穴に、住居中央部及び南側コーナー部を後世のビットによって切られている。本住居跡は、南東側で第8号住居跡と重複するが、それを切って構築されている。

平面形は、やや不整の長方形を呈している。規模は、北東から南西方向3.42m・北西から南東方向3.00mを測る。壁高は、南西壁で最高15cm・北東壁で最低4cmある。主軸方位は、N-41°-Eをとる。

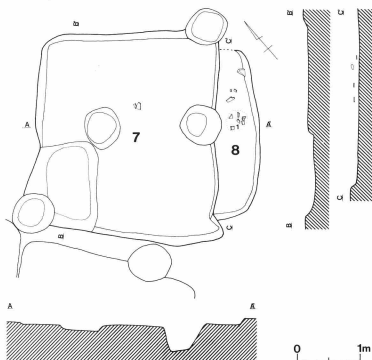
床面は、ローム粒子とロームブロックを均一に含む暗黄褐色を若干埋め戻した貼床式である。全体にやや軟弱で、凹凸が顕著に見られる。住居内にカマドの痕跡は認められず、柱穴・周溝等の施設も存在しないが、西側コーナー部に長さ134cm・幅110cmの長方形を呈する土壇状の穴を伴う。

出土遺物は非常に少なく、土器片が少量出土しただけである。

第8号住居跡（第21図、図版5－1）

本住居跡は、B地点の西側に位置する。遺構上面を耕作によってかなり削平されており、また住居跡の北西側の大半を重複する第7号住居跡に切られているため、遺存状態は極めて悪く、本住居跡の全容は不明である。

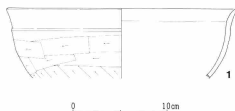
平面形は、残存する部分から推測すると、正方形もしくは長方形を呈していたと思われる、規模は北東方向から南西方向2.71m、北西から南東方向は72cmまで測れる。壁高は、南東壁で最高11cmある。主軸方位は、N-37°-Eをとると推測される。



第21図 第7・8号住居跡

床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色を若干埋め戻した貼床式である。全体にやや軟弱で、細かな凹凸が顕著に見られる。住居内施設は、残存する部分ではまったく確認されなかった。

出土遺物は、土器片が少量出土しているだけで、図示したNo 1の鉢は、住居中央部の床面付近に破片がたまって出土している。



第22図 第8号住居跡出土土器

第8号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径 (24.2cm)	体部は内湾しながら立ち、 口縁部は短く立ちぎみに外 反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面ナデの後ケズリ、内 面ナデ。	白色粒・角閃石 赤色粒 内外—橙褐色	残存率 口縁部4破片

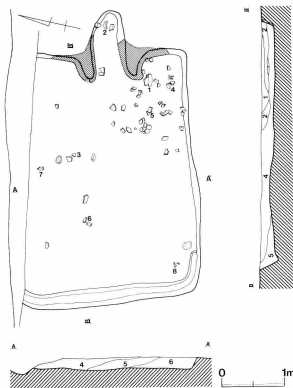
第9号住居跡（第23・24図、図版7－1・2）

本住居跡は、B地点の中央部北端に位置し、東側6mには第11号住居跡がある。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居の北側の一部を後世の耕作によって破壊されている。本住居跡は、B地点の中央部を南西から北東方向に向かって開析している比較的小さな谷が埋没した後に、構築されている。

平面形は、確認された部分から推測すると、長方形を呈していたと考えられ、規模は東西方向

4.08m、南北方向は2.80mまで測れる。壁高は、西壁と南壁で最高22cm、東壁で最低6cmある。主軸方位は、N-74°-Eをとる。

床面は、ローム層をそのまま平に掘って床面にした直床式である。全体に平坦をなすが、住居中



第23図 第9号住居跡

第9号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（黄白色粘土粒子を均一に、焼土粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黄白色土層（黄白色粘土ブロックを多量に含む。）

第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第9号住居跡カマド土層説明

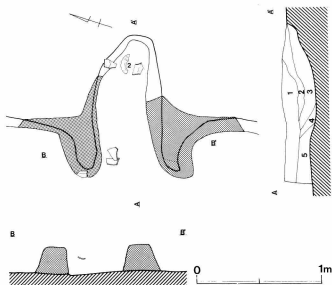
第1層：黄白色粘土層（黄白色粘土）

第2層：暗灰褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：暗灰褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量に、粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第5層：暗褐色土層（粘土粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第24図 第9号住居跡カマド

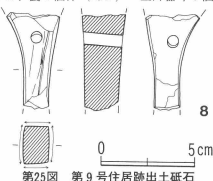
中央部にやや起伏が見られる。床面はあまり硬化していない。柱穴・貯蔵穴等の住居施設はなく、西壁下と南壁下の一部に、幅約30cm・床面からの深さ10cmの連続する周溝が見られる。

覆土は5層に分層でき、住居南西側からの流入が顕著に認められる。

カマドは、東壁の中央やや南寄りの位置に、壁を掘り込んで作られている。天井部はすでに崩壊しており、袖のみ残存している。規模は、全長115cm・最大幅102cmを測り、壁に対してほぼ直角に掘り込まれている。袖は、黄白色粘土を床面上に盛り上げ、壁面に貼り付けて構築されているが、壁外の燃焼部中央の壁面まで粘土を回している。また、両袖の外側の住居壁面にも一部粘土を貼って、貼り壁にしている。燃焼部は、住居の床面を若干掘りくぼめており、比較的良く焼けている。

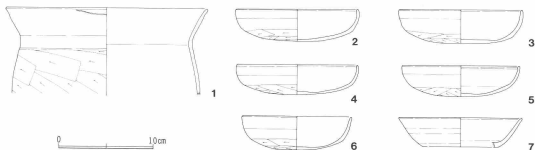
出土遺物は、住居のカマド前面から南東コーナー部を中心に、多くの土器片が出土しているが、いずれも床面より5～10cm程度浮いている。図示できたものは、甕1個体（Na1）・土器器坏5個体（Na2～6）・須恵器坏1個体（Na7）で、Na2はカマド内、Na3・6・7は住居中央の北寄り付近、Na1・4・5は住居南東側から出土している。

本住居跡からは、土器以外に砥石が1個（Na8）住居南西コーナー部付近の覆土中から出土している。長さ5cm、幅は1.4cm～3cmあるが、両端を欠失している。直径6ミリの穿孔がやや斜めに施され、4面ともよく擦られている。石材は、凝灰岩である。



第25図

第9号住居跡出土砥石



第26図 第9号住居跡出土土器

第9号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (21.3cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向のケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 赤色粒 ㊦㊧一淡茶褐色	残存率約1/4
2	坏	口縁部径 13.0cm 器高 3.4cm	体部は浅めの丸底を呈し、口縁部は内湾ぎみに立つ。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。	白色粒・角閃石 ㊦㊧一淡橙褐色	残存率1/4
3	坏	口縁部径 12.9cm 器高 3.6cm	体部は浅めの丸底を呈し、口縁部は内湾しながら立つ。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ、内面ナデ。	白色粒・角閃石 ㊦㊧一淡橙褐色	残存率約1/4
4	坏	口縁部径 (12.8cm) 器高 3.1cm	体部は浅めの丸底を呈し、口縁部は内湾ぎみに立つ。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面下半ケズリ。内面ナデ。	白色粒・角閃石 ㊦㊧一淡茶褐色 ㊨一黒灰色	残存率約1/4

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
5	坏	口縁部径 (12.5cm) 器 高 3.3cm	体部は浅めの丸底を呈す。 口縁部は内湾しながら立ち、 口唇部はやや丸く肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。体 部外面下半ケズリ、体内面 面下半ナデ。	白色粒・角閃石 ⑧—淡茶褐色 ⑨—淡橙褐色	残存率約1/4
6	坏	口縁部径 (11.6cm) 器 高 3.6cm	体部は他に比べてやや深い 丸底を呈す。口縁部は立ち 口唇部はやや外側に向く。	口縁部外面ヨコナデ。体部 外面下半ケズリ。内面ナデ。	白色粒・角閃石 ⑨⑩—橙褐色	残存率約1/4
7	須恵器 坏	口縁部径 (13.1cm) 器高 3.1cm 底部径(8.0cm)	ロクロ成形。口縁部は直線的 に強く外傾する。	口縁部内外面回転ナデ。底 部外周回転ヘラケズリ。	白色針状物質 ⑨⑩—灰色	残存率 口縁部片破片 南比企窯産

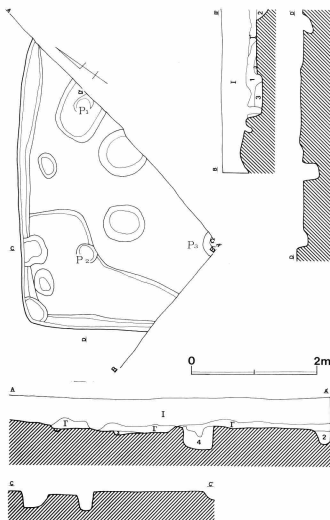
第10号住居跡 (第27図、図版8-1)

本住居跡は、B地点の南東端に位置している。遺構の遺存状態は極めて悪く、耕作が住居跡の床

面下にまで及んでおり、調査区内で確認したのは住居跡の掘り方部分である。

平面形は、調査区内で確認した部分から推測すると、正方形もしくは長方形を呈していると思われる。規模は、北東から南西方向が4.60mまで、南東から北西方向が3.09mまでそれぞれ測れる。主軸方位は、北東方向を向くと思われ、N-52°-Eをとる。

本住居跡の掘り方は、住居周辺部が中央部より10cm程度深くなる周溝状を呈するもので、掘り方底面には細かな凹凸が顕著に見られる。P1～



第27図 第10号住居跡

第10号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、焼土粒子・炭化粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第2層：黒褐色土層（ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない）

第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性はなく、しまりを有する）

P3は、その位置から本住居跡の支柱穴と考えられる。住居中央部には土壇状の穴が2箇所あるが、本住居跡に伴うものかは不明である。北西壁下と南西壁下には、幅約20cmの周溝の痕跡が認められる。

出土遺物は、掘り方埋土中より土器片が数片出土しただけである。

第11号住居跡（第28図、図版8—2）

本住居跡は、B地点の北東端に位置し、東側約6mには第9号住居跡が存在している。耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良くない。また、住居北壁の西寄りの部分を第3号土壇によって切られている。

平面形は、東壁が調査区外のため不明であるが、長方形を呈するようである。規模は、東西方向



第28図 第11号住居跡

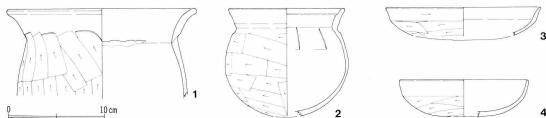
第11号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（白色粘土ブロックを均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量に含む。粘性・しまりともない）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）
- 第4層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する）

3.85m・南北方向3.58mを測る。壁高は、南北壁で7cm・西壁で2cmある。主軸方位は、N-75°-Eをとる。

床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土（第5層）を埋め戻した貼床式で、住居中央部は比較的堅緻であるが、住居周辺部はやや軟弱である。全体に水平をなすが、やや起伏が見られる。住居東側の土器片が散乱している床面上には、カマドの崩壊土と思われる白色粘土のブロックが多数見られ、おそらく東壁に付設されていることが予想される本住居跡のカマドの崩壊により、土器とともにこちら側に流れ出したものであろう。柱穴や周溝等の住居内施設は、まったく確認されなかった。

出土遺物は、住居東側のカマド崩壊土にまじって土器片が多く出土しているが、図示した土器のうち、№1の甕は、他の出土土器より古い時期のものであり、本住居跡に伴うものではなく、混入したものであろう。



第29図 第11号住居跡出土土器

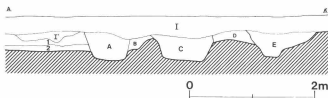
第11号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	甕	口縁部径 (19.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はゆるやかに外反し、胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のケズリ。内面ナデ。	白色粒・角閃石 赤色粒 ④⑤—橙褐色	残存率 口縁部破片
2	鉢	口縁部径 (12.0cm) 器 高 (11.3cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は厚く外反し、内面にヘラによる段を有す。胴部は丸く張り、底部は丸底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向のケズリ。内面ヘラナデ。	白色粒 ④⑤—暗茶褐色	残存率約1/2
3	皿	口縁部径 (16.1cm)	体部は浅く、平底に近い形態を呈す。口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 ④⑤—橙褐色	残存率 口縁部破片
4	坏	口縁部径 (13.4cm)	体部はやや浅い丸底を呈し口縁部は内湾ぎみに開く。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	白色粒・角閃石 ④⑤—橙褐色	残存率 口縁部破片

第12号住居跡（第30図、図版10-2）

本住居跡は、C地点の調査区西端に位置し、西側約7mにはB地点検出の第10号住居跡がある。遺構の遺存状態は比較的良好であるが、住居跡の東側周辺には柱穴状のビットが多数あり、住居の東側コーナー部や南東壁の一部を、それらによって破壊されている。調査区内で確認できたのは、住居の東側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁高は、南東壁で19cmを測る。主軸方位は、南東壁の向きからN-60°-Eをとるとと思われる。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式である。全体に凹凸や起伏



第30図 第12号住居跡

第C層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第D層：暗褐色土層（第B層に類似）

第E層：暗褐色土層（ロームブロックを多量に、ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない）

がなく平坦に作っており、比較的堅緻である。調査区内では住居の施設は確認できなかった。

出土遺物は、非常に少なく、土器片が少量出土しただけである。

第12号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第2層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない）

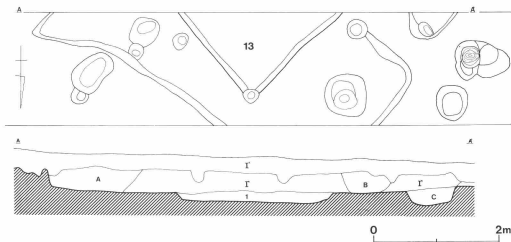
ピット土層説明

第A層：暗黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。粘性はなく、しまりを有する）

第B層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第13号住居跡（第31図、図版11-1）

本住居跡は、C地点の西側に位置し、西側6mには第12号住居跡が、東側2.5mには第14号住居跡が近接している。耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。調査区



第31図 第13号住居跡

第13号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量に含む。粘性・しまりともない）

第A層：暗褐色土層（A 軽石を均一に、ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第B層：暗褐色土層（A 軽石・ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第C層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない）

内で確認できたのは、住居の北側コーナー部付近だけであるため、本住居跡の全容は不明である。壁高は、10cmあり、主軸方位は確認した壁の方向から推測すると、N-45°-Eをとると思われる。

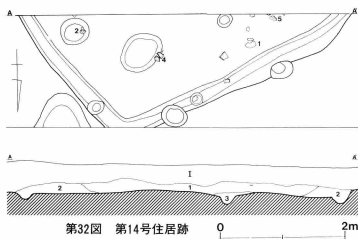
床面は、ローム層を直接掘って平にした直床式である。住居内の施設は、確認された部分からはまったく検出されなかった。覆土は1層で、その埋没状態は不明である。

出土遺物は、非常に少なく、土器片が数片出土しただけである。

第14号住居跡（第32図、図版11-2）

本住居跡は、C地点中央部のやや西側寄りに位置し、西側2.5mには第13号住居跡が、東側1mには第15号住居跡が近接している。耕作による削平が著しく、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。調査区内で確認されたのは、住居北側の一部と北側コーナー部だけであり、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、調査区内で確認した住居の北西壁と北東壁がやや開いているが、正方形もしくは長方形を基調にしていると思われる。規模は、北東から南西方向4.60m、北西から南東方向は3.10mまで測れ、壁は6～15cmある。主軸方位は、N-63°-Eをとる。



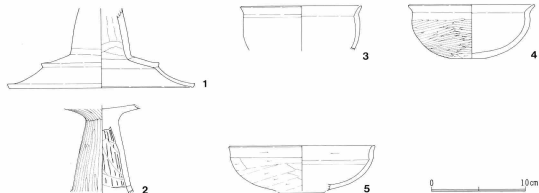
第32図 第14号住居跡

第14号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない）

第2層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない）



第33図 第14号住居跡出土土器

床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻した貼床式である。全体にやや起伏が見られ、軟弱である。住居内からは、ビットが3箇所検出されているが、その性格は不明である。北西壁下と北東壁下には、幅約25cm・床面からの深さ約10cmの連続する周溝がある。カマドは、時期的に存在すると思われるが、本住居跡に付設されているかどうかは不明である。

覆土は、3層に分かれる。遺存状態が悪いため明確ではないが、自然堆積の様相を示している。

出土遺物は、住居の床面付近から土器片が少量出土している。図示できたものは、高坏2個体と坏3個体であるが、いずれも破片で完形品はない。

第14号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	高 坏	脚端部径 19.4cm	粘土紐積み上げ成形。脚端部は段を有す。段と脚端部は面をもつ。	外面丁寧なナデ。柱状部内面ユビナデ、脚端部内面ヨコナデ。	白色粒・赤色粒 ④一茶褐色 ④一暗茶褐色	残存率約1/4 外面に黒斑あり。
2	高 坏	残 存 高 9.4cm	粘土紐積み上げ成形。脚部はやや短く開いている。	外面ハケの後ミガキ。内面ナデ。	白色粒 ④④一茶褐色	残存率 脚部のみ。
3	坏	口縁部径 (12.8cm)	口縁部は短く外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	白色粒・赤色粒 ④④一暗茶褐色	残存率 口縁部1/4破片
4	坏	口縁部径 (13.3cm) 器 高 5.7cm	口縁部は短く外傾する。体部は浅く、底部は小さな平底を呈す。	口縁部内外面及び内面ナデ。体部外面ケズリの後ミガキ。	片岩粒・角閃石 赤色粒 ④④一暗茶褐色	残存率約1/4 外面に黒斑あり。
5	坏	口縁部径 (15.4cm) 器 高 (5.0cm)	口縁部は短く直立ぎみに外反する。体部は浅く、底部は平底を呈すと思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	白色粒・角閃石 赤色粒 ④④一明茶褐色	残存率約1/4

第15号住居跡（第34図、図版13-2）

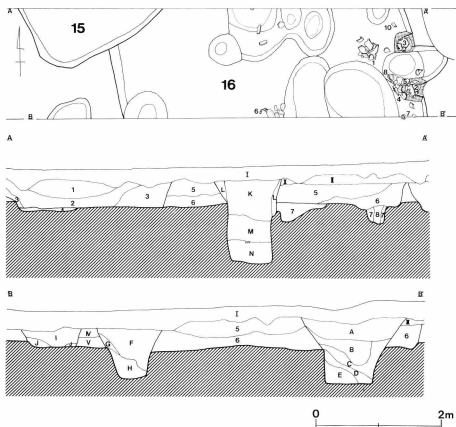
本住居跡は、C地点の中央部に位置し、東側約1mには第14号住居跡が近接している。住居跡の一部は第16号住居跡と重複し、それを切って構築している。遺構の遺存状態は、比較的良好である。調査区内で確認されたのは、住居の南側コーナー部付近のみであるため、本住居跡の全容は不明である。主軸方位は、住居の南東壁の方向から、N-63°-Eをとるとと思われる。

床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土（第34図第4層）を一部埋め戻した貼床式である。全体に平坦で水平をなし、比較的良好である。覆土は3層に分かれ、その堆積状態は自然堆積を示す。出土遺物は、土器片が数片出土しただけである。

第16号住居跡（第34・35図、図版12-1・2）

本住居跡は、C地点の中央部に位置し、カマド煙道部の先端を第17号住居跡に、住居東側の一部を第15号住居跡に、住居中央部を後世の柱穴状の大きなビットによって切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、正方形あるいは長方形を呈すと思われる。規模は、東西方向は4.90mを測り、南北方向は調査区外に及ぶため不明である。壁高は、東壁で37cm・西壁で5cmある。主軸方位は、N-79°-Eをとる。



第34図 第15・16号住居跡

第15号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

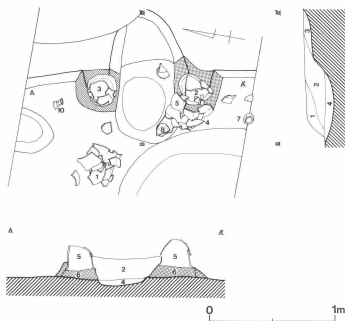
第16号住居跡土層説明

- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第6層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）

ピット土層説明

- 第A層：暗褐色土層（A 軽石・ロームブロック・白色粘土ブロックを微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第B層：暗褐色土層（A 軽石・ロームブロック・はなく粘土ブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第C層：暗黄褐色土層（A 軽石・ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第D層：暗褐色土層（A 軽石・ローム粒子を多量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第E層：黄白色土層（ロームブロック・白色粘土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第F層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第G層：暗褐色土層（ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）
- 第H層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第I層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）

- 第J層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に含む。粘性・しまりともない。）
 第K層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
 第L層：黒褐色土層（白色粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
 第M層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量に含む。粘性・しまりともない。）
 第N層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりともない。）



第35図 第16号住居跡カマド

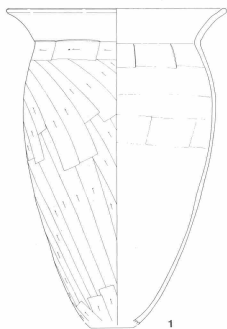
床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻した貼床式であり、全体にやや起伏が見られ、比較的堅緻である。住居跡内にはピットが多数検出されているが、本住居跡に伴うものはない。覆土は2層に分かれ、その堆積状態は自然堆積を示す。

カマドは、住居跡の東壁に、壁を掘り込んで作られている。規模は、全長108cm・最大幅115cmを測り、壁に対してほぼ直角に付設されている。天井部はすでに崩壊しており、カマドの両袖と燃烧部及び煙道部の一部が残存している。袖は、黄白色粘土を住居の床面上に盛り上げて構築しているが、両袖の芯にNa2とNa3の甕を伏せて袖の補強にしている。燃烧部は、第4層を埋め戻した掘り方を有し、内面は比較的よく焼けている。

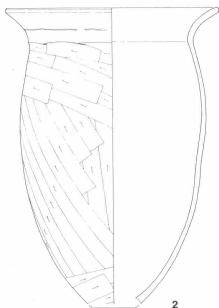
出土遺物は、住居跡のカマド周辺から、完形品を含む多くの土器が出土している。図示したものの多くは、カマド内や周辺の床面直上から出土しているが、Na9とNa10の須恵器はいずれも覆土中から出土した破片である。

第16号住居跡出土土器観察表

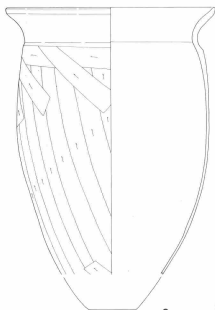
番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	甕	口縁部径 23.1cm 残 存 高 33.6cm	口縁部はゆるやかに外反し、 口唇部内面はややくぼんで いる。胴部はあまり張らず、 長胴を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴 部外面上端横方向・上半か ら下半斜方向のケズリ。内 面ヘラナデ。	白色粒・赤色粒 ②⑥一淡橙褐色	底部欠失。 胴部外面下半 に黒斑あり。



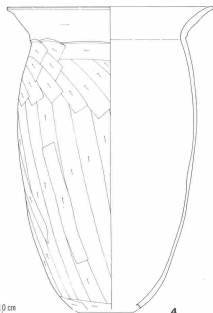
1



2



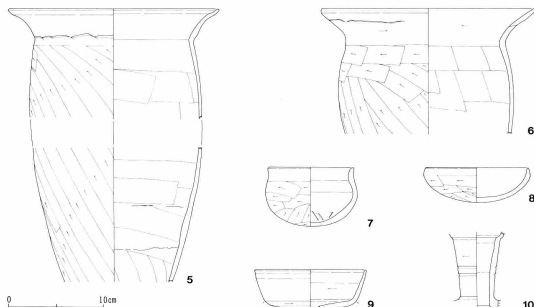
3



4

0 10 cm

第36図 第16号住居跡出土土器 (1)



第37図 第16号住居跡出土土器(2)

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
2	甕	口縁部径 22.6cm 残 存 高 31.4cm	口縁部はゆるやかに外反する。胴部はあまり張らず、長胴を呈す。口縁部外面に粘土粗積み上げ痕あり。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向・下半斜方向・下端横方向のケズリ。内面ナデ。	白色粒・角閃石 ⑩⑪—淡橙褐色	底部欠失。
3	甕	口縁部径 22.0cm 残 存 高 28.3cm	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部内面はややくぼみ、外面に丸みを帯びた面を有す。胴部は張らず、長胴を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上端横方向・上半から下半斜方向のケズリ。内面ナデ。	白色粒 ⑩⑪—橙褐色	底部欠失。
4	甕	口縁部径 21.7cm 残 存 高 32.1cm	口縁部はゆるやかに外反する。胴部は張らず、長胴を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向・下半斜方向のケズリ。内面ナデ。	白色粒・角閃石 赤色粒 ⑩⑪—暗橙褐色	残存率約75%
5	甕	口縁部径 22.2cm	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部内面は内反り状の段を有す。胴部は長胴を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向のケズリ。内面ヘラナデ。	白色粒・角閃石 赤色粒 ⑩⑪—明橙褐色	残存率約75%
6	甕	口縁部径 22.6cm	口縁部はゆるやかに外反し、外面に粘土粗積み上げ痕を残す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半横方向・下半斜方向のケズリ。内面ヘラナデ。	白色粒・角閃石 ⑩⑪—淡橙褐色	残存率約75%
7	短頸壺	口縁部径 9.1cm 器 高 6.3cm	口縁部はやや外反ぎみに直立する。体部はあまり張らず、丸底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面軟質刷毛状工具によるナデ。	白色粒・角閃石 赤色粒 ⑩⑪—明橙褐色	完形。 器表面は荒れている。
8	坏	口縁部径 10.8cm 器 高 3.7cm	口縁部は短く直立する。体部は丸底を呈す。器内は厚く、器表面はざらつく。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	片岩粒・角閃石 ⑩⑪—暗橙褐色	完形。
9	須恵器 坏	口縁部径 (11.8cm) 器 高 4.0cm	口縁部は底より直線的に立ち、口唇部付近は調整時の凹凸を有す。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面手持ちヘラケズリ。	白色粒・黒色粒 ⑩⑪—淡灰色 ⑩—褐色	残存率約1/4

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
10	須恵器 長頸壺		頸部は直線的にやや開き、 外面中央に2本の凹線あり。 口縁部との境は段を有す。	頸部内外面回転ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一暗灰色	頸部のみ。

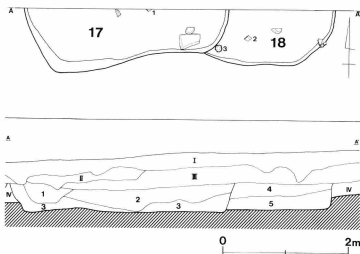
第17号住居跡（第38図、図版13-1）

本住居跡は、C地点の中央部に位置し、重複する第16号住居跡と第18号住居跡を切って構築されている。調査区内で確認できたのは、住居跡の南側半分だけであるため、本住居跡の全容は不明であるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、コーナー部が丸みを帯び、壁もやや歪んで整然とした形態を呈していないが、正方形もしくは長方形を基調としているものと思われる。規模は、東西方向3.16m、南北方向は1.13mまで測れる。壁高は、西壁で40cm・東壁で46cmある。主軸方位は、南壁の向きから推測すると、N-80°-E位をとるとと思われる。

床面は、ローム層を掘り込んで平にした直床式である。全体に平坦でほぼ水平をなし、比較的堅緻である。確認した部分では、住居内の施設はまったく検出されなかった。覆土は3層に分かれ、その堆積状態は自然堆積を示す。

出土遺物は、土器片が多く出土しているが、いずれも覆土中からの出土である。また、住居南東側コーナー部の覆土中から、平坦面をもち表面が焼けて赤色化した大きな片岩が出土している。



第38図 第17・18号住居跡



第39図 第17号住居跡出土土器

第17号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（白色粒子を均一に、焼土粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（白色粒子・焼土粒子を均一に、炭化粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量に含む。粘性・しまりともない。）

第18号住居跡土層説明

- 第4層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量に含む。粘性・しまりともない。）

第17号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	須恵器 蓋	口縁部径 17.0cm 器 高 3.8cm	ロクロ成形。天井部はやや浅く、扁平化したつまみが付く。口縁部は玉縁状に曲る。	天井部外面回転ヘラケズリ。内外面回転ナデ。	黒色粒・小石 (図8)一淡灰褐色	残存率約1/2
2	須恵器 杯	口縁部径 (12.3cm) 器 高 3.5cm	ロクロ成形。口縁部は内弯しながら開き、口唇部は短く横に開く。	内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	黒色粒 (図8)一淡灰色	残存率 口縁部1/4破片
3	杯	口縁部径 11.6cm 器 高 3.7cm	口縁部は外傾し、口唇部はやや内屈する。底部は平底に近い形状を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。内面ナデ。	黒色粒 (図8)一暗橙褐色	残存率約1/2

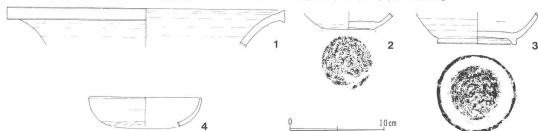
第18号住居跡（第38図、図版13-1）

本住居跡は、C地点調査区中央部のやや東寄りに位置し、東側1.5mには第19号住居跡が近接している。調査区内で確認されたのは、住居跡の南側だけであり、さらに重複する第17号住居跡によって住居跡の西側を切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、住居の南東側コーナー付近しか確認できないため不明であるが、コーナー部は丸みを帯び、やや不整な形状を呈している。規模は、東西方向が2.10mまで、南北方向が87cmまで測れ、壁高は東壁で40cmある。主軸方位は、南壁の向きからはほぼ東西方向をとるものと思われる。

床面は、ロームブロックを均一に含む暗黄褐色土を若干埋め戻した貼床式である。平坦で水平をなし、全体に堅緻である。確認した部分では、住居内の施設はまったく検出されなかった。覆土は2層に分かれ、その堆積状態は自然堆積を示す。

出土遺物は、土器片が少量出土しているが、すべて覆土中からの出土である。



第40図 第18号住居跡出土土器

第18号住居跡出土土器観察表

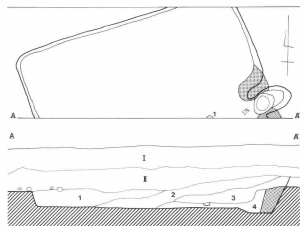
番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	須恵器 甕	口縁部径 (29.2cm)	口縁部はゆるやかに外反し口唇部は上下に肥厚し、平坦な面を有する。	口縁部内外面回転ナデ。	白色粒 (図8)一暗灰色	残存率 口縁部1/4破片
2	須恵器 杯	底部径 5.4cm	底部は小さな平底を呈し、口縁部はゆるやかに開く。	内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	白色針状物質 (図8)一暗灰色	底部のみ。 南比金業産
3	須恵器 高台付杯	高台部径 8.4cm	ロクロ成形。高台部貼り付け。高台部はやや外方に開く。	内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	白色粒・片岩粒 (図8)一暗灰色 (図8)一淡灰白色	底部のみ。
4	杯	口縁部径 (11.9cm)	口縁部は内弯しながら開く。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	白色粒・赤色粒 (図8)一橙褐色	残存率 口縁部1/4破片

第19号住居跡（第41・42図、図版14—1・2）

本住居跡は、C地点の東側に位置し、西側約1.5mには第18号住居跡が近接している。調査区内で確認できたのは、住居跡の北側半分にあたり、南側半分は調査区外に及んでいるため、本住居跡の全容は不明である。遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、正方形もしくは長方形を呈していると考えられ、調査区内で確認した部分は、比較的整然とした形態をしている。規模は、北東から南西方向3.66m、北西から南東方向は2.17mまで測れる。壁高は、北東壁で34cm・南西壁で25cmある。主軸方位は、N-70°-Eをとる。

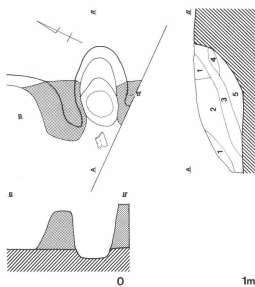
床面は、ローム層を掘り込んで平にした直床式である。全体に平坦で水平をなし、比較的堅緻である。住居内の施設はまったく検出されなかった。



第41図 第19号住居跡

第19号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗黄褐色土層（黄褐色・粘土ブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第4層：暗褐色土層（焼土粒子・黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第42図 第19号住居跡カマド

第19号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黄褐色土層（黄褐色粘土ブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（黄褐色粘土粒子・焼土粒子を多量に、黄褐色粘土ブロックを微量に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第3層：黒褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：赤褐色土層（焼土ブロック。）
- 第5層：暗褐色土層（焼土粒子・粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

カマドは、住居の北東壁に付設されている。規模は、全長76cm・幅は80cmまで測れ、壁に対してほぼ垂直に壁を掘り込んで構築している。天井部はすでに崩壊し、カマドの両袖と燃烧部が残存している。袖は、住居の床面上に黄褐色粘土ブロックを盛り上げ、壁に貼り付けて構築し、燃烧部は住居床面を約10cm掘り下げて作られている。燃烧部は非常によく焼けて、赤色化している。

出土遺物は、住居跡の覆土中より、比較的多くの土器片が出土しているが、図示できたものは、カマド近くの床面付近から出土した坏1個体だけである。



第43図 第19号住居跡出土土器

第19号住居跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	坏	口縁部径 (12.3cm) 器 高 3.5cm	口縁部はやや内湾ぎみに開く。底部は平底ぎみの形状を呈す。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内面一橙褐色	残存率約5%

第2節 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第45図、図版9-1）

本建物跡は、B地点の西側に位置し、重複する第4～7号住居跡を切って構築している。規模は、北東から南西方向3間・北西から南東方向4間で、梁行5m・桁行8.5mを測る。主軸方位は、N-65°-Wをとる。

柱の通りは非常に良く、梁行・桁行とも直線上にきれいに並んでいる。梁行は、柱心間が約1.6mで、当間隔に並んでいる。これに対して桁行は、柱心間の間隔が広く、P5～P7とP12～P14の中の2間は2mを測り、P1～P14・P4～P5とP7～P8・P11～P12の両外側の1間はそれぞれ2.25mと、中の2間に比べてやや広がっている。

柱穴は、ほとんどのものが直径約60cmの円形を呈している。深さは、北西側梁行の柱穴が約30cmとやや浅くなっているが、他は40cm～60cmを測る。いずれも底面は平坦をなしている。柱痕は確認されなかった。

出土遺物は、柱穴の覆土より土器片が少量出土しただけである。



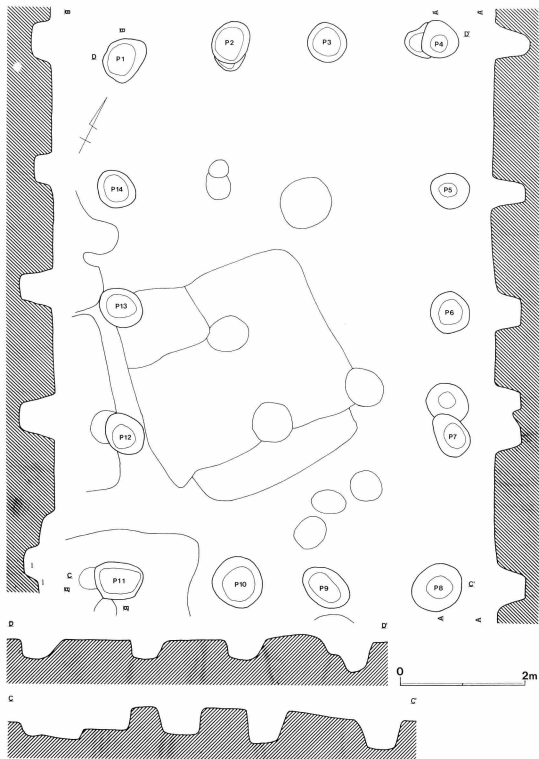
第44図 第1号掘立柱建物跡出土土器

第1号掘立柱建物跡出土土器観察表

番号	器種	法 量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	坏	口縁部径 (13.6cm)	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は短く横へ開く。	内外面回転ナデ。	白色粒・黒色粒 赤色粒 内面一橙褐色	残存率 口縁部破片 酸化焼成

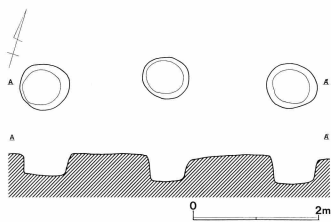
第2号掘立柱建物跡（第46図）

本建物跡は、B地点の中央北寄りに位置する。南東側には、本建物跡と梁行の向きをほぼ同じくする第1号掘立柱建物跡が近接している。本建物跡は、調査区内で直線上に等間隔で並ぶ柱穴状の



第45图 第1号掘立柱建物跡

ビットが3箇所検出されただけなので、これが掘立柱建物跡であるかどうかは不明であるが、各ビットは規模が比較的大きく、しっかりした形態を呈しており、覆土が第1号掘立柱建物跡と類似する黒褐色土であることから、掘立柱建物跡の一部の可能性が高いと考えられる。本建物跡の他の柱穴が調査区内に存在しないことから、それらは北側の調査区外にあつたものと思われ、調査区内で



第46図 第2号掘立柱建物跡

確認した柱穴列は本建物跡の南東側梁にあたると考えられる。なお、本建物跡の西側にも同様のビット列があるが、これらは柱通りや形態が不揃いであり、建物跡かどうかは判断できない。

規模は、梁行2間で、4mを測り、柱心間は2mある。梁行の方位は、 $N-73^{\circ}-E$ をとる。柱穴は、いずれも直径80cmの円形を呈し、深さは約40cmあり、底面は平坦をなしている。

出土遺物は、土器片が数片出土しただけである。

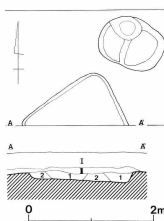
第3節 土 壙

第1号土壙（第47図）

本土壙は、A地点の西側に位置し、東側約4mには第1号住居跡が、西側約2mには第2号住居跡がある。調査区内で確認されたのは、本土壙の北側の一部であるため、その全容は不明である。後世の耕作が深くまで及んでおり、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形で、調査区内で確認した部分から推測すると、正方形もしくは長方形を呈すると思われる。規模は、北東から南西方向1.5m・北西から南東方向は1mまで測れる。壁高は10cm～15cmあり、底面は比較的平坦である。主軸方位は不明であるが、北西壁の方向は $N-56^{\circ}-E$ を向く。

本土壙は、まったく遺物が出土しなかったため、時期の決めてを欠くが、覆土の観察からA軽石降下以前でも比較的古い時期と考えられ、おそらく古代のものと思われる。



第1号土壙土層説明

第1層：黒褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第47図 第1号土壙

第2号土壇（第18図）

本土壇は、B地点の西側に位置し、重複する第6号住居跡を切って作られている。調査区内で確認できたのは、本土壇の北側半分であり、その全容は不明である。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、調査区内で確認した部分から推測すると、円形に近い形態を呈すと思われる。規模は直径112mあり、深さは35cmを測る。底面は、やや凹凸が見られ、東側に向かって深くなっている。

出土遺物は、土器片が数片出土しているが、重複する第6号住居跡からの混入の可能性がある、時期は不明である。

第3号土壇（第28図）

本土壇は、B地点の北東端に位置し、重複する第11号住居跡を切って作られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

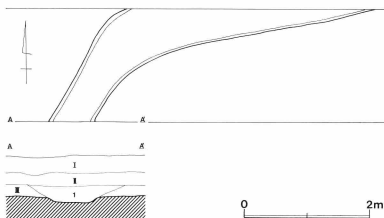
平面形は、やや不整の楕円形を呈し、規模は2.17m×1.70mを測る。深さは48cmあり、底面は狭くかなり凹凸が見られ、複雑な形状を呈している。覆土は、A軽石を均一に含む暗灰色の粘質土の単純土層である。

出土遺物は、土器片が数片出土しているが、本土壇に伴うものではなく、周辺から混入したものである。時期は、覆土の観察より、近代のものと考えられる。

第4節 溝 跡

第1号溝跡（第48図）

本溝跡は、A地点の東側に位置する。流路は、北東から南西方向に向かい、調査区内で南西方向に強く向きを変えている。幅は、60cmから90cmを測り、深さは25cmある。底面は平坦である。水が流れていた痕跡はまったくなく、区画等の空堀であった可能性が高い。



第48図 第1号溝跡

覆土は、白色粒子と焼土粒子を微量含む、粘性のない締まった黒褐色土（第1層）である。遺物の出土がなかったため、本溝跡の時期は不明であるが、A軽石を含まない基本第Ⅱ層下にあることから、比較的古い時期の所産であることが推測される。

第2号溝跡（第9図、図版2-1）

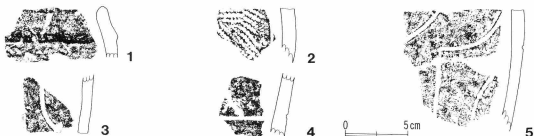
本溝跡は、A地点の西側に位置し、重複する第2号住居跡を切っている。幅は1mを測り、深さは20cmある。底面は狭く、やや丸底を呈する。流路は、北東から南西方向にとる。水が流れていた痕跡はなく、空堀であった可能性が高い。

出土遺物は、土器片が少量出土している。時期は、覆土の観察から、古代のものと思われる。

第5節 その他の出土遺物

縄文土器（第49図）

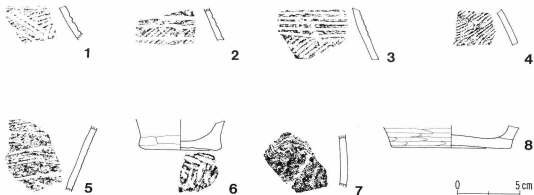
縄文土器は、B地点で検出された奈良・平安時代の住居跡やビットの覆土中より、中期と後期の土器片が少量出土している。このうち図示できたものは5片で、Na1と2が中期後半の加曾利E4式土器、Na3～5は同一個体の破片と思われるもので、後期前葉の称名寺式土器である。



第49図 根田遺跡出土縄文土器

弥生土器（第50図）

弥生土器は、B地点で検出された奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡の覆土中より、中期と後期の土器片が少量出土している。Na1～6は中期のもので、このうちNa5は縦走羽状条痕が施されており、中期初頭に位置付けられる。Na1～3は、縄文（LR）施文後に太くしっかりした篦描沈線文を施すもので、中期後半に位置付けられる。Na6は、底部に網代痕が見られる。Na7と8は後期のもので、Na7には櫛描波状文が横位右回りに施文されている。



第50図 根田遺跡出土弥生土器

第V章 ま と め

根田遺跡の調査では、縄文時代から平安時代にわたる遺物や遺構が検出されているが、その主体を占めるのは奈良・平安時代の集落跡である。これらの継続期間は、小支谷を挟んで近接する雷電下遺跡（駒宮他1979、恋河内1990）と同一時期であり、常に両遺跡は密接な関係にあったことが想像される。ここでは本遺跡から出土した該期土器の編年の位置を述べてまとめたいが、良好な資料が少なく明確な位置づけが困難であるため、周辺遺跡の資料と諸氏による当地域の編年作業（鈴木1983・1984、中村1984、赤熊1988）を参考にして検討したい。

本遺跡の該期の遺構から出土した土器は、概ね下記のⅠ期～Ⅳ期に分けることができる。このうち、第11号住居跡出土の甕（第29図№1）は、その形状や胴部上半が縦方向のヘラケズリであることから、Ⅰ期以前に位置づけられる。

＜Ⅰ期＞ C地点の第16号住居跡出土土器（第36・37図）が該当する。甕は、カマドの袖に使用されていた№3のように、外面の頸部と胴部の境に段を有し胴部全面に縦方向のヘラケズリを施す、比較的古い形態を呈するものも見られるが、他はすべて口縁部が「く」の字に強く外反し、胴部上半に斜方向のケズリを施し、外面の頸部と胴部の境にケズリ取りによる段を有する形態のものである。№8の坏は、小ぶりで口縁部の断面が三角形を呈し、その直下よりヘラケズリを施すもので、上里町八幡太神南遺跡A地点第1号住居跡（赤熊他1985）や岡部町六反田遺跡第127号住居跡（石岡他1981）の時期に特徴的に見られる形態である。№7の短頸壺は、口縁部が短く直立し胴部の深いもので、№8の坏に近い時期のものと思われる。№9の須恵器坏は、八幡太神南遺跡A地点第1号住居跡出土の須恵器坏の系譜上に連なると考えられるもので、上里町立野南遺跡第2号住居跡（赤熊他1985）出土の小ぶりのものに類似する。

このように第16号住居跡出土土器は、その出土状態においては良好な一括性を有するが、坏と短頸壺は甕や須恵器坏の時期に伴出するものに比べて古い特徴が認められる。Ⅰ期は、立野南遺跡第2号住居跡かその直前に位置づけられ、鈴木氏の甕4類期、赤熊氏の第4期にはほぼ相当しよう。

＜Ⅱ期＞ B地点の第3号住居跡（第13図）と第11号住居跡（第29図）の出土土器が該当する。皿は、口縁部が短く口唇部に向かって薄くなる形態のもので、第3号住居跡№2に比べ第11号住居跡№3の方が後出的である。坏は、口縁部が内屈せずやや開きぎみに立ち、外面が口縁部ヨコナデ直下よりヘラケズリを施すものである。第11号住居跡№2の鉢は、口縁部が外反する形態で、口縁部内面に甕によく見られるような範による段を有する。Ⅱ期は、出土土器が少なく明確な位置づけが困難ではあるが、およそ鈴木氏の甕5類期、赤熊氏の第4期後半から第5期に相当しようか。

＜Ⅲ期＞ B地点の第6号住居跡（第20図）と第9号住居跡（第26図）の出土土器が該当するが、第9号住居跡の方が後出的である。甕は、器高が低くなり、口縁部の外反度・外湾度ともかなり弱い形態を呈している。坏は、器高が低くやや扁平化し、口縁部は直線あるいは内湾ぎみに立っている。外面の調整は、口縁部ヨコナデ下に未調整部を有し、体部ヘラケズリの範囲が下がり狭くなっている。Ⅲ期は、鈴木氏の甕6類期～甕7類期、赤熊氏の第6期～第7期に相当しよう。

＜Ⅳ期＞ A地点の第2号住居跡（第11図）№1の甕が該当する。口縁部の外反度はⅢ期の甕よりもさらに弱くなり、口縁部の形態も口唇部が極端に短く薄くなっている。このような口縁部の形態

は、Ⅰ期からの系統を引く「く」の字口縁甕の終末段階に特徴的に見られるものである。Ⅳ期は、鈴木氏の甕7類期、赤熊氏の第8期に該当しよう。

＜Ⅴ期＞ A地点の第2号住居跡出土の№2と№3の甕（第11図）が該当し、B地点の第4号住居跡出土の皿（第15図）やC地点の第18号住居跡出土の坏（第40図№4）もおそらく該期のものではないかと思われる。甕は、いわゆる「コ」の字状口縁を呈するものであるが、口縁部上半の屈曲部が比較的長く、また口唇部に面をもたないことから、「コ」の字状口縁甕でも古い形態のものである。皿は、口径が小さく器高も浅い形状を呈し、口縁部と体部の境が不明瞭である。外面の調整も体部上半に未調整部を有し、ヘラケズリの範囲が下がり狭くなっている。Ⅴ期は、「コ」の字状口縁甕の成立期に位置づけられ、鈴木氏の甕8類期、赤熊氏の第9期に該当しよう。

＜Ⅵ期＞ C地点の第19号住居跡出土の坏（第43図）が該当する。底部は平底化し、口縁部は長く直線的に外傾する形態を呈す。類例は、児玉町阿知越遺跡A地点第6号住居跡（鈴木他1983）に見られる。Ⅵ期は、鈴木氏の甕12類期、赤熊氏のほぼ第11期に該当しよう。

＜Ⅶ期＞ C地点の第17号住居跡出土土器（第39図）が該当する。坏は、平底で口縁部がやや内反り状に立ち、口唇部が短く内弯する特徴的な形態を呈する。須恵器坏は、口縁部が内弯しながら立ち、口唇部が横に開く形態を呈している。須恵器蓋は、鈕がつき口縁部から天井部への屈曲がなく、比較的器高の低い形態のものである。該期の須恵器蓋は、すでに皿が逆転した鈕のつかない形態のものが主体を占めており、このような鈕のつく古い系統の蓋はほとんど見られない。Ⅶ期の良好な資料としては、上里町中堀遺跡第5号住居跡（駒宮他1978）があり、鈴木氏の甕14類期、赤熊氏の第12期に該当しよう。

＜Ⅷ期＞ B地点の第1号掘立柱建物跡出土の須恵器坏（第44図）が該当する。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は短く横に開く形態を呈し、おそらく高台が付くものと思われる。ロクロ目の間隔が非常に細かいのが特徴である。類似した形態のものは、雷電下遺跡A地点第12号住居跡・第15号住居跡（駒宮他1979）や同B地点第67号住居跡・第80号住居跡（恋河内1990）に見られる。これらの伴出土器からⅧ期は、「コ」の字状口縁甕の終末期以降に該当しよう。

以上のように、良好な資料が少なくにもかかわらず、本遺跡出土土器をⅠ～Ⅷ期の8段階に区分したが、中には1個体による段階設定も多く、時期区分として妥当とは言えないものもある。またこれらは、資料的制約から時期としての様相がほとんど明らかではなく、単に土器を相対的な前後関係により配列しただけのものである。この本遺跡出土土器のⅠ～Ⅷ期の段階は、連続と継続するものではなく、長期的・短期的な時間の空白期間が存在する部分もあるが、明確な位置づけが困難であることから、あえて空白期を設定することはしなかった。

該期の遺跡や遺物を検討し、その歴史性を考えるうえで、その資料に対する実年代の比定は必要不可欠なものである。現在のところその確固たる根拠をもたないが、赤熊氏の実年代比定を参考に、本遺跡のⅠ～Ⅷ期の年代を考えてみると、概ねⅠ期は7世紀終末～8世紀初頭、Ⅱ期は8世紀前半、Ⅲ期は8世紀後半、Ⅳ期は8世紀終末、Ⅴ期は9世紀初頭、Ⅵ期は9世紀後半、Ⅶ期は9世紀末、Ⅷ期は10世紀以降に位置づけられようが、9世紀後半以降の年代比定に関しては、まだまだ流動的である。

参 考 文 献

- 赤熊浩一他 (1985) 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集
- (1988) 『将監塚・古井戸Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
- 荒川正夫他 (1980) 『大久保山Ⅰ』 早稲田大学本庄校地文化財調査室
- (1986) 『早稲田大学本庄校地埋蔵文化財発掘調査概報2』 早稲田大学
- 石岡憲雄他 (1978) 『下廊遺跡』 上里町下廊遺跡調査会
- (1981) 『六反田』 岡部町六反田遺跡調査会
- 市川 修 (1977) 『田中前遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
- 井上尚明他 (1986) 『将監塚・古井戸Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
- 柿沼幹夫他 (1979) 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
- 恋河内昭彦 (1990) 『雷電下遺跡—B・C地点—』 児玉町文化財調査報告書 第13集
- 小久保徹他 (1978) 『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集
- 駒宮史朗他 (1973) 『枇杷橋遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第20集
- (1976) 『本郷東・愛宕』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第7集
- (1977) 『御林下遺跡』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第13集
- (1978) 『中堀・耕安地・久城前』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第15集
- (1979) 『雷電下・飯玉東』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集
- 埼玉県 (1984) 『新編埼玉県史』資料編3 埼玉県史編さん室
- 篠崎 潔他 (1986) 『皂樹原・檜下遺跡発掘調査概報Ⅰ』 皂樹原・檜下遺跡調査会
- (1987) 『皂樹原・檜下遺跡発掘調査概報Ⅱ』 皂樹原・檜下遺跡調査会
- 菅谷浩之他 (1976) 『大御堂檜下・女堀遺跡発掘調査報告』 埼玉県遺跡調査会報告 第28集
- (1976) 『宮下・樋之口遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会
- (1977) 『北貝戸遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会
- (1979) 『北谷戸・下道堀・上耕地遺跡発掘調査概報』 美里村教育委員会
- (1980) 『武蔵新倉館』 美里村教育委員会
- 菅谷浩之・駒宮史朗 (1973) 『児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要』 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
- 鈴木徳雄 (1983) 『古代北武蔵における土師器製作手法の画期』 『土曜考古』第7号
- (1984) 『いわゆる北武蔵系土師器坏の動態』 『土曜考古』第9号
- 鈴木徳雄他 (1981) 『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書 第2集
- (1981) 『深町・城の内遺跡』 深町遺跡調査会
- (1983) 『阿知越遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書 第3集
- (1984) 『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書 第4集
- (1989) 『真下境東遺跡』 児玉町文化財調査報告書 第9集
- 外尾 常人 (1987) 『五明庵寺発掘調査報告書』 上里町教育委員会

- 立石盛詞他 (1983) 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 谷井 彪 (1979) 『畑中遺跡』 見玉郡美里村畑中遺跡調査会
- 中島 宏他 (1981) 『清水谷・安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
- 中村 倉司 (1984) 『古代北武蔵における供膳器の様相』 『土曜考古』 第9号
- 中村倉司他 (1980) 『販藁神社前遺跡・一本松古墳』 埼玉県遺跡調査会報告 第39集
- (1980) 『臺遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告 第41集
- 長谷川勇他 (1985) 『夏目遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第5集2分冊
- (1987) 『杜具路遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第5集3分冊
- 昼間孝志他 (1983) 『天神林・高野谷戸』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第22集
- 細田 勝他 (1984) 『向田・権現塚・村後』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第38集
- 本 庄 市 (1976) 『本庄市史』 資料編
- 増田逸朗他 (1978) 『塚本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第10集
- 増田 一 裕 (1985) 『本庄遺跡群発掘調査報告書一久下東遺跡・遺構編一』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第7集
- (1988) 『東富田遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第10集
- (1988) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集1
- (1989) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集2
- 丸 山 修 (1987) 『前原遺跡発掘調査報告書』 上里町教育委員会
- 大和 修他 (1983) 『若宮台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第28集

圖 版

图版 1



1. A地点全景



2. 第1号住居跡



1. 第2号住居跡



2. 第2号住居跡カマド



1. B地点全景



2. 第3号住居跡

図版 4



1. 第4号住居跡



2. 第4号住居跡カマド

図版 5



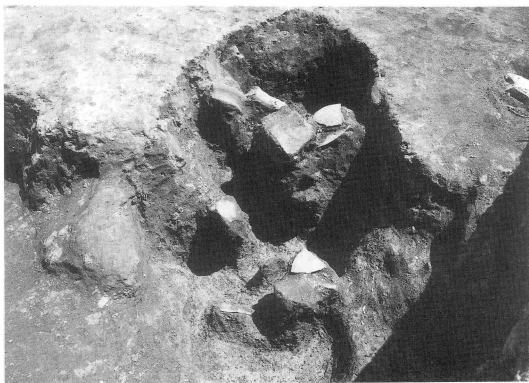
1. 第5・7・8号住居跡



2. B地点発掘調査風景



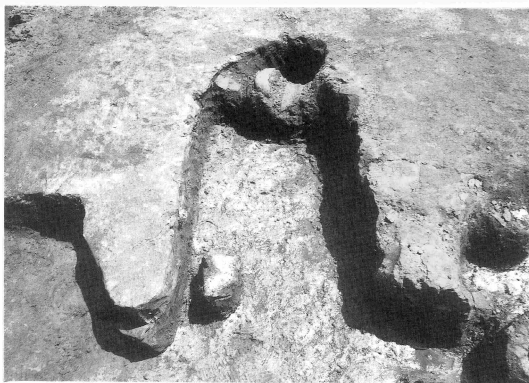
1. 第6号住居跡



2. 第6号住居跡カマド



1. 第9号住居跡



2. 第9号住居跡カマド



1. 第10号住居跡



2. 第11号住居跡



1. 第1号掘立柱建物跡



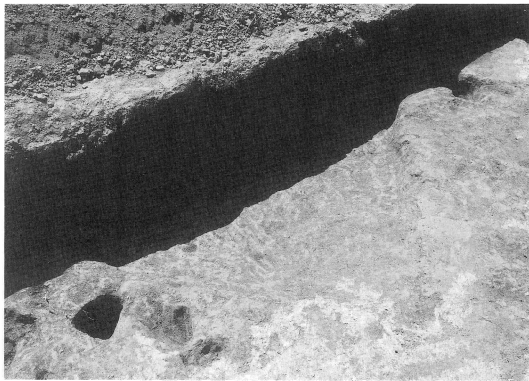
2. B地点調査区西側全景



1. C地点全景



2. 第12号住居跡



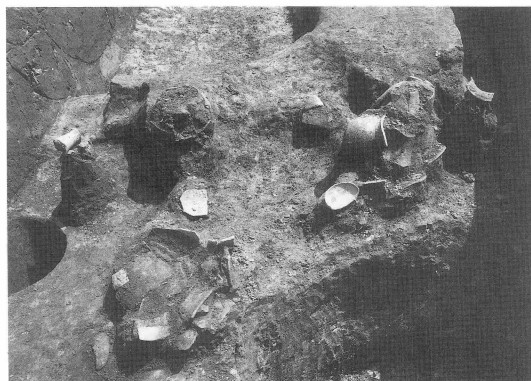
1. 第13号住居跡



2. 第14号住居跡



1. 第16号住居跡



2. 第16号住居跡カマド



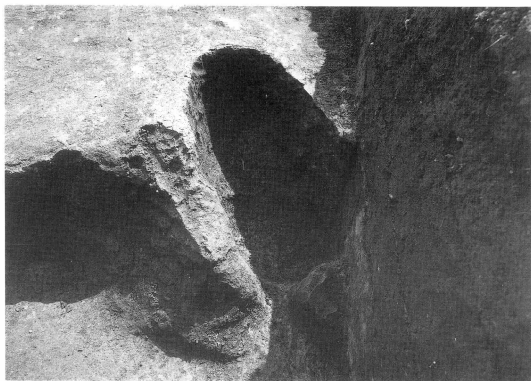
1. 第17・18号住居跡



2. 第15～19号住居跡



1. 第19号住居跡



2. 第19号住居跡カマド



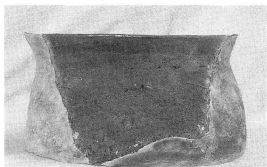
1. B地点発掘調査風景



2. C地点発掘調査風景



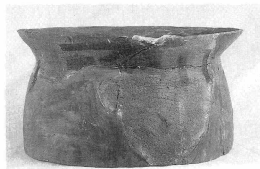
2-1



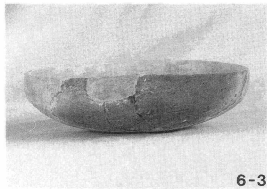
2-3



4-1



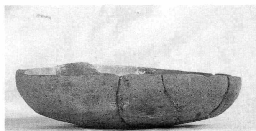
6-1



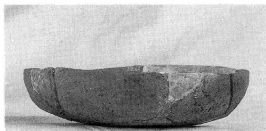
6-3

3. 根田遺跡第2・4・6号住居跡出土土器

図版16



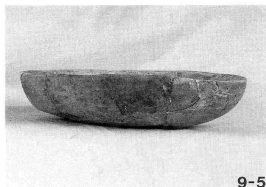
9-2



9-3



9-4



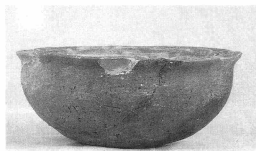
9-5



9-6



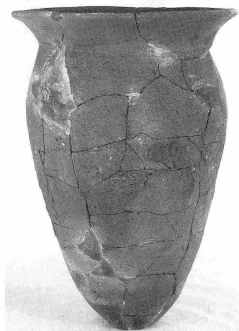
14-1



14-4



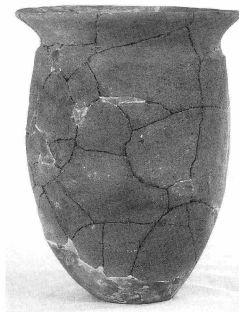
14-5



16-1



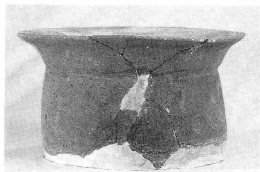
16-2



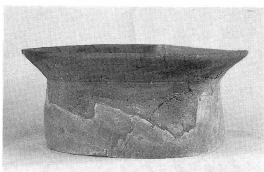
16-3



16-4



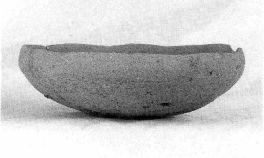
16-5



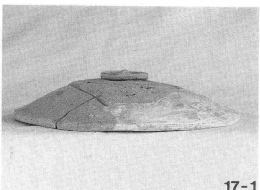
16-6



16-7



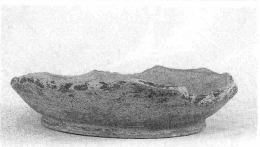
16-8



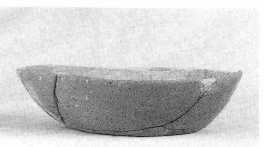
17-1



17-3



18-3



19-1

児玉町文化財調査報告書 第12集

根 田 遺 跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

平成2年3月10日 印刷

平成2年3月20日 発行

発行者 児玉町教育委員会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356